

同形異音類義語の整理

田淵 敬光*

1. はじめに

日本語教育の現場において類義表現・語彙を正確に学習者に理解させるにあたって、その説明に苦慮する場面が多々ある。また、「市場」は大学進学を目指す日本語学習者に対しての授業で頻出する語彙であるが、この語を教える際に、「市場—しじょう」は「機能的なもの・目に見えないもの・大規模なもの」であり「市場—いちば」は「場所的なもの・目に見えるもの・小規模なもの」というような説明がしばしば見られる。この2つの語の違いについて日本語学習者に対して問うてみても同様の返答があることが多い。しかし、はたしてこのような説明で日本語学習者がその違いを十分に理解できるものであろうか。また、教員もその語義を深く理解したうえで指導しているといえるのであろうか。

他方、「市場—しじょう、いちば」のような、日本語における同じ形（字）でありながら、音が違い、意味が似ている語の呼称については、定まったものはなく、その語を捉える角度により様々な用語が用いられている。例えば、言語情報処理の分野においては、田中（1971）や梅村・清水（2000）などで、「同表記語」や「同形語」といった名称が使われており、水谷・松原・坪井（1971）では、「同字異訓熟語」といった表現をしている¹。また、国語辞典を捲ると「同形異議語²」、「同字別義³」、「同字別声⁴」などといった記載があり、対象を日本語だけでなく英語なども含めると、例えば、三木（2014）などで扱われているような同綴異音語といった名称も出てくる⁵。このように、様々な呼称（用語）が散見される点については、菅野（2023）⁶でその用語の概観と整理が試みられている。以上を踏まえて、本稿では、仮名を含む文字列が一致しており、異なる音と似た語義をもつ語に焦点を当てることから、「同形異音類義語」を採用することとした。

なお、この同形異音類義語を扱った研究は、筆者のサーベイの限り、ほとんど見られなかった。同形異音の問題であれば、先述の言語情報処理分野で、梅村・清水（2000）が、テキスト音声合成時における読みの付与に際しての問題について分析しているが、同形異音かつ類義のものについて言及した研究は、管見の限り大島（1992）のみである。大島（1992）では、異音同表記語の種類と問題点を日本語学習者、すなわち日本語教育の観点から論じており、そのなかで同形異音類義語も「異音類義同表記（異語）」として扱われている。しかし、大島（1992）では、「異音類義同表記（異語）」の例がいくつか列挙されるにとどまっており、分析等を行われていない。

以上のように、同形異音類義語は、既存の研究ではまだほとんど触れられていないため、各語の語義の差異の整理やそれを日本語学習者へどう理解させるかといったアプローチを早急に行う必要がある。

そこで、同形異音類義語の語義の差異や日本語学習者に向けた教授法についての検討等は別稿に譲るが、本稿はその礎石として、同形異音類義語が国語辞典でどのような語義の記述がなされているのかを調査・整理することとする。

2. 調査と整理の方法

本稿の調査対象語は、日本の高等教育機関への進学を目的とした日本語学習者にとって区別が難しく誤

用の生じやすい同形異音類義語とする。まず、国立国語研究所（1971）の同形短単位表⁷より同形かつ類義の語を抽出する。次に1万語語彙分類集⁸によって示される語の難易度でさらに選別する。具体的には、進学者を対象とした日本語教育において扱うものと考えられる語である日本語 NAT-TEST または旧日本語能力試験4級以上の語を、品詞を問わず対象語とする。

表 2-1 比較表に使用する国語辞典⁹

サイズ	辞典名
大型辞典	『日本国語大辞典』第二版（小学館）
中型辞典	『広辞苑』第七版（岩波書店）
	『大辞林』第四版（三省堂）
	『大辞泉』第二版（小学館）
小型辞典	『角川必携国語辞典』第十五版（角川書店）
	『新明解国語辞典』第八版（三省堂）

対象語を抽出したうえで、各国語辞典が示す語義を比較できるよう表にまとめる。比較表の作成にあたっては、表 2-1 のように、大型辞典として小学館『日本国語大辞典』第二版、中型辞典としては岩波書店『広辞苑』第七版、三省堂『大辞林』第四版、小学館『大辞泉』第二版、そして、小型辞典として角川書店『角川必携国語辞典』第十五版、三省堂『新明解国語辞典』第八版を使用することとした。

国立国語研究所（1971）の示す同形異音語から類義語を抽出し、それらから、1万語語彙分類集により NAT-TEST または旧日本語能力試験4級以上の語を含む字のみをさらに抽出した¹⁰。進学者のための日本語教育において扱うと思われる語を整理したものを表 2-2 に示す¹¹。抽出・整理した対象語は32字68語となった。なお、本稿が対象とする語は品詞による分類等を行わない。

表 2-2. 同形異音類義語

1	音	おと	17	種	しゅ		
		ね			たね		
2	下	した	18	獣	けもの		
		しも			けだもの		
3	家	いえ	19	宿	やど		
		か			しゆく		
		け（筆者追加）			しん		
4	間	はざま	20	身	み		
		ま			21	生花	いけばな
		あいだ					せい
		かん					かが（筆者追加）
5	卷	かん	22	性	せい		
		まき			しょう		
6	気質	かたぎ	23	値	あたい		
		きしつ			ね		
7	球	きゅう	24	怒る	いかる		
		たま			おこる		
8	金	かね	25	梅雨	つゆ		
		きん			ばいう		
9	戸	こ	26	博士	はくし		
		と			はかせ		

10	工場	こうじょう	27	白髪	しらが
		こうば			はくはつ
11	今日	きょう	28	変化	へんか
		こんにち			へんげ
12	根本	こんぽん	29	抱く	いだく
		ねもと			だく
13	際	きわ	30	牧場	ぼくじょう
		さい			まきば
14	札	さつ	31	末	すえ
		ふだ			まつ
15	市場	いちば	32	面	つら
		しじょう			めん
16	主	しゅ			
		ぬし			

3. 対象語の比較表の作成

表2-2に基づいて各語の語義を先述した6冊の国語辞典から抽出し、語義記述比較表として、表3-1から表3-32にまとめた¹²⁾。なお、今後の比較・検討、さらには日本語学習者に向けた教授法等についての考察に向けて、語義の表記が一致している、もしくは、比較対象の語そのものを記載している、また、筆者が語義が同じであると判断した部分には下線「 」を加えている。

表3-1. 音（おと、ね）の語義記述比較表

字 語	音	
	おと	ね
日本国語大辞典	<p>①広義には、聴覚で感ずる感覚全般。狭義には、生物（有情物）の「こえ」以外の物理的音声。</p> <p>②水・風・波などの自然現象や、楯（かじ）などの無生（無情）物の発する音響。衝撃・摩擦によるひびき。楽器でも、古くは特に、鈴、鐘、鼓など打楽器類の音声に偏って使われる傾向がある。後には、生物の声以外の物理的音声全てをさす。</p> <p>③鳥や鹿などの動物の声をさす。特に、遠方から聞こえてくるような場合に使われる。</p> <p>④人間の声。特に、実際には発せられていない状況について、禁止や打消の表現を伴って使われることが多い。</p> <p>⑤人の気配。</p> <p>⑥評判。うわさ。風聞。</p> <p>⑦たより。おとさた。音信。「音（も）せず「音（も）なし」のように、否定表現を伴うことが多い。</p> <p>⑧返事。答。下に否定表現をとることが多い。</p>	<p>①泣くこと。</p> <p>②物の音や人の声。また、ひびき。ねいろ。</p> <p>③虫、鳥、獣などが鳴く声。</p> <p>④人の泣く声。</p>
広辞苑	<p>①物の響きや人・鳥獣の声。物体の振動が空気の振動（音波）として伝わって起こす聴覚の内容。または、音波そのものを指す。音の強さは音波の物理的強度、音の高さは振動数の大小、音の大きさは感覚上の音の大小を指し、三者は区別される。</p> <p>②おとずれ。たより。音信。風聞。うわさ。</p> <p>③応答。返事。</p> <p>④（言）発話の最小単位。子音と母音。単音。</p>	<p>（「泣く」「鳴る」と同源）</p> <p>①物の音や人の声。特に、心に訴えてくるような音声。</p> <p>②鳥・虫などの鳴き声。</p> <p>③人の泣き声。</p>
大辞泉	<p>①物の振動によって生じた音波を、聴覚器官が感じとったもの。また、音波。人間の耳に聞こえるのは、振動数が毎秒約16～2万ヘルツの音波。</p> <p>②うわさ。評判。</p> <p>③鳥獣の声。</p> <p>④訪れ。便り。音沙汰。</p>	<p>①おと。</p> <p>②声。また、泣き声。</p> <p>③鳥獣などの鳴き声。</p>
大辞林	<p>①空気・水などの振動によって聴覚に引き起こされた感覚の内容。また、その原因となる空気などの振動。音波。人間は振動数20～20000ヘルツくらいの音波を音として感じる。音の性質は強さ・高低・音色の三要素で表すことができる。</p> <p>②（「音に聞く」「音に聞こえた」などの形で）うわさ。評判。</p> <p>③たより。おとずれ。</p> <p>④返事。応答。</p>	<p>①人・鳥・虫などの音声を、情緒的にとらえている。</p> <p>②物の発する快い響き。</p>

角川必携国語辞典	①耳で聞きとれる <u>ひびき</u> 。 ②たより。通信。	①美しい音。耳に快く <u>ひびくもの</u> にいう。 ②人の泣く声。
新明解国語辞典	①物がすれあったり何かをした時に、空中・水中などを通じて我われの耳に感じられるもの。 ②評判。	美感を伴うおと。

表3-2. 下(した、しも)の語義記述比較表

字 語	下 した	下 しも
日本国語大辞典	<p>I 〈名〉</p> <p>①位置の関係で、低い方。一定の広さのある下部の平面。</p> <p>①低い場所や位置。</p> <p>④見おろされるような低い所。下方。</p> <p>⑤その上に、あるものが接して乗っている位置。場所。</p> <p>⑥転じて、有力者の庇護を受けている地位。有力者の保護のもと。</p> <p>⑦物が自然な状態にあるとき、地面に近い部分。底。</p> <p>⑧階下。また、遊里(吉原)で、二階にいる女郎に対し、階下にいる主人・男衆などをいう。</p> <p>⑨(特に、遊女屋などで、主人の居る部屋(内証)が階下にあったところから)内証をいう。また、そこにいる主人。</p> <p>⑩本や紙を置いたときその人に近い部分。また、正常に立てたとき下部になる位置。</p> <p>⑪あることがらの決定的な影響下。…のため。</p> <p>⑫物事の程度が低いこと。</p> <p>⑬比較して、力量の劣っていること。敗勢。</p> <p>⑭比較して、数量、年齢などの点でより少ないこと。また、そのもの、人。</p> <p>⑮比較して、階級や身分、地位などの低いこと。また、その人。部下。下男。</p> <p>⑯能楽で、ワキ・ツレなど従の立場にある演技者。</p> <p>⑰高音に対して低音。音階の低い音。</p> <p>⑱下等の見物席。棧敷(さじき)などの特別席に対していう。</p> <p>⑲「したばたらき(下働)」の略。</p> <p>⑳→した(下)に居る・した(下)に置く・した(下)に下に。</p> <p>㉑女性の陰部をいう。盗人仲間の隠語。</p> <p>㉒物事の裏面に関すること。さきぎられて見えない部分。内側。</p> <p>①包まれている部分。他の物でおおわれて隠れている部分。物の内側。中。内。</p> <p>②ところ。心の奥。内心。</p> <p>③内々であること。多く、動詞の連用形を伴って、副詞化したり、「したに」の形で副詞的に用いる。ひそかに。</p> <p>④表立たせないこと。争いなどを公に持ち出さないこと。転じて、示談(じだん)。</p> <p>⑤時間的もしくは空間的に、あとの時点、個所。</p> <p>①すぐあと。直後。即刻。</p> <p>②つばがったものあとの部分。</p> <p>③食べ残し、飲み残しのこも。特に、貴人が食べ残した食事の残り。おした。</p> <p>④代償や、代金の一部分としてさし出す品物。</p> <p>⑤(江戸時代、大奥や大名などの奥向きで)実家、町方などをいう。さと。やど。</p> <p>II < 語彙 ></p> <p>①名詞の上に付いて、現在より前、過去などの意を表す。</p> <p>②名詞の上に付いて、準備、試み、また、あらかじめするなどの意を表す。</p>	<p>もと、「流れの下流のほう」をいった語か。または、「ひと続きのもの末」をさしていった語か。後には「ものの低い部分」「地位や価値の低いもの」「中心から離れた地域」などの意にも言う。した。</p> <p>①ひと続きのもの末の方。</p> <p>①川の、川口に近いほう。下流。川下。</p> <p>②和歌などの後半、または、終わりの部分。また、物語などの後半部分。</p> <p>③時の移り変わりを水の流れに見立てて、現在に近い方をいう。</p> <p>④月の下旬。</p> <p>⑤ある時点またはある箇所からあとの部分。以下。次。</p> <p>⑥(①の意から)川の downstream に近い開けた地方。</p> <p>⑦高い部分に対して低い部分。</p> <p>①低い所。下部。下方。した。</p> <p>②体の腰より下の部分。特に、陰部、尻(しり)などをいう。</p> <p>③袴(はかま)。肩衣(かたぎぬ)を上(かみ)というのに対する。</p> <p>④→しも(下)に居る。</p> <p>⑤(客間、座敷、客席などを上(かみ)というのに対して)台所、勝手などの称。</p> <p>⑥大小便。</p> <p>⑦月経。</p> <p>⑧下品なこと。みだらなこと。</p> <p>⑨価値の低い方。劣っている方。</p> <p>①①価値、能力などが劣っていること。</p> <p>②②官位、身分の低いもの。臣下。人民。した。</p> <p>③③雇われている者。召使い。</p> <p>④④貴人の座から離れた座席。下座。</p> <p>⑤⑤貴人の座から離れた建物や部屋。入口や台所に近い部屋。</p> <p>⑥⑥中心から離れた地方をいう。御所から離れた地。また、都から離れた地方。</p> <p>①①下京(しもぎょう)のこと。</p> <p>②②京都から見て、大阪をさしていう語。</p> <p>③③中国・四国・九州などの西国地方。</p> <p>④④「しもて(下手)②」に同じ。</p>
広辞苑	<p>①上部・表面から遠い部分。</p> <p>①裏。底。うち。表面の対。</p> <p>②下方。上の対</p> <p>③ところ。ところの奥。内心。</p> <p>④ひそか。内々。</p> <p>⑤目上の者の指導・庇護のもとにある事。</p> <p>⑥物事の程度が低いこと。</p> <p>①他より地位・格式・能力などが低いこと。また、そのような位置・人。しも。</p> <p>②年齢が若いこと。</p> <p>③前の対。</p> <p>①すぐ後。直後。</p> <p>②使い古しの品物。おさがり。食べ残しのもの。</p> <p>④後の対。現在より前。</p> <p>①さき。以前。</p> <p>②前もってすること。準備。試み。</p> <p>⑤買い物の代金の一部に充てるために渡す品物。</p>	<p>①一つづきの事や物の、上部または初めから隔たった部分。「かみ」に対する。</p> <p>①(空間的に)高い所に対して低い所。</p> <p>⑦下部。下方。した。</p> <p>④川の downstream。川下。</p> <p>②身体の腰部より下の部分。特に陰部を指すこともある。</p> <p>⑤転じて、糞。大小便。また、月経。</p> <p>②(時間的に、または順序で)後の方。終り。末。</p> <p>⑦近代。現代。</p> <p>④月の下旬。</p> <p>⑦ある期間を二つに分けた後の方。</p> <p>⑤和歌の終りの方。主に後半の二句。下の句。</p> <p>⑥階級の劣っていること。また、そのような人。</p> <p>①官位・身分の卑しいもの。</p> <p>②年下。年少者。</p> <p>③(君主・朝廷に対して)臣下。人民。</p> <p>④(主人・長官などに対して)部下・雇人。</p> <p>⑤貴人の座からはなれたところ。下座。</p> <p>⑥宮中や貴人の家などで女房達の詰めている局。</p> <p>⑦京からはなれた地方。特に西国地方。いなか。地方。</p> <p>⑧内裏からはなれたところ。南。</p>

<p>大辞泉</p>	<p>①位置関係で、あるものに比べて低いほう。 ⑦場所・位置が低いこと。低いところ。 ④音の低い部分。 ②表側に現れていないところ。 ⑦覆われている部分。 ④指導や庇護を受けていること。 ③程度・地位・年齢・能力・数量などが<u>劣っている</u>こと。また、その人。 ④何かをしたすぐそのあと。直後。 ⑤⑦買い物の代金の一部に充てること。下取り。 ①金の引き当てにするもの。 ⑥こころ。心底。 ⑦名詞の上に付いて、前もってするという意を表す。</p>	<p>①ひと続きのもの末。また、いくつかに分けたものの終わりの部分。 ⑦川の下流。また、その流域。川下。 ④時間的にあとと考えられるほう。現在に近いほう。後世。 ⑦ある期間を二つに分けた場合のあとのほう。 ⑤月の下旬。 ④物事の終わりの部分。末の部分。 ⑦和歌の後半の2句。 ②位置の低い所。また、低いと考えられる所。 ⑦下方に位置する所。下部。 ④からだの腰から下の部分。また、特に陰部や尻をさすことが多く、それを話題にする下品さや、大小便に関する事柄をもう。 ⑦下位の座席。下座。末座。末席。 ⑤客間・座敷などに対して、台所・勝手などをさす語。 ④舞台の、客席から見て左のほう。下手。 ③地位・身分の低い人。君主に対して、臣下・人民。雇い主に対して、使用人・召し使い。 ④中心から離れた地。 ⑦都から離れた地。特に、京都から離れた地方。 ④京都で、御所から離れた南の方角・地域。転じて一般に、南の方の意で地名などに用いる。 ⑦他の地域で、より京都に遠いほう。昔の国名などで、ある国を二分したとき、都から見て遠いほう。 ⑤京都から見て、中国・四国・九州などの西国地方。特に、キリシタン関係書では九州をさす。 ⑤格や価値が劣っているほう。 ⑥⑦宮中や貴人の家で、女房が詰めている局。 ④（下半身につけるところから）袴。</p>
<p>大辞林</p>	<p>①基準とする点より相対的に低い方向、または位置。 ②ある人の支配の及ぶところ。支配下。 ③表面から見えない部分。内側。 ④紙などを人の前に置いたとき、その人に近い方向。またはその位置。 ⑤連続しているものの、順序が後ろの部分。 ⑥地位・能力・品質などが<u>劣っている</u>方。 ⑦年齢が少ない方。年少。 ⑧形式名詞。「〔…下から〕〔…下より〕」の形で…の直後に。…したすぐあとに。 ⑨名詞の上に付いて、「準備のための」「あらかじめの」の意を表す。 ⑩内心。心中。 ⑪（多く「下に」の形で）内々。ひそかに。 ⑫代金の一部として差し出す品物。下取りの品。</p>	<p>空間的・時間的に連続したものの下の方。末の方。低いところ。 ①連続したものの末の方。 ①川の下流。また、下流の地域。地名にもしばしば見られる。 ②現在の方に近い時代。 ③いくつかに分けたものの最後のもの。 ⑦月や年の終わりの部分。 ④書物の終わりの部分。和歌の後半の二句。 ②位置の低い所。 ①下の方。した。 ②人の体の腰よりも下の方。また、転じて、大小便にかかわるもの。 ③中心となる所から離れた地方。 ①京から離れた地。京から、より遠い所。 ②近畿地方に対し、大阪をさしている。 ③京都で御所に遠くなる方。南の方。 ④地位・身分の低い人。 ①臣下。人民。 ②官位・身分の低いもの。 ③召し使い。 ④宮中などで女官の詰めている所。 ⑤末座。下座。 ⑥舞台の下手。</p>
<p>角川必携国語辞典</p>	<p>①①基準とする点より低い方向や位置。 ②外から見えない部分。内側。 ③地位・能力・年齢などが<u>低い</u>こと。 ④直後。すぐあと。 ②（造語）（「下～」の形で）「前もってする」という意味をあらわす。</p>	<p>①上かみから流れてくる水や風の行く方向。 ②したの部分。 ③あとの部分。 ④身分・地位の低いこと。また、低い者。 ⑤大小便など。</p>
<p>新明解国語辞典</p>	<p>①①低い（方にある）こと（所）。 ②地位・能力・数量などの程度が低いこと。劣っていること。 ③何かの内側にあつて表から見えない所。 ④何かをしたすぐそのあと。 ①～③の対義語は、上うえ。 ②（造語） ①先を見越して前もってすること。 ②地面に直接触れて用いること。</p>	<p>（「したの方」の意） ①（からだの）腰の部分以下。 ②（上流と違って）川下。 ③（前・初めと違って）次に来る表現。 ④身分の卑しい人（のすわるべき場所）。 ⑤都から遠い地方。いなか。 ⑥大小便・月経など、人の前で口にするのをはばかる、不浄とされるもの。→上カミ・中ナカ。</p>

表 3-3. 家 (いえ、か、け) の語義記述比較表

字 語	家		
	いえ	か	け
日本 国語 大辞典	<p>① <名></p> <p>① 人々が寝起きして生活を営んでいるところ。家屋敷、土地などを含んだ空間全体。また、特に自分の住まいとするところ。わが家。</p> <p>② ①に住んでいる人々。家族。家人。また、自分を含めた一家。家庭。</p> <p>③ ①の中で、人が住むために作った建物のみを指す。家屋。屋。</p> <p>④ 妻。家刀自 (いえとじ)。</p> <p>⑤ 先祖から代々伝えてきた家族団体。また、それにまつわるもの。</p> <p>⑥ 代々伝えてきた一族一家・家族団体。特に、家名・家督・家系をいう場合。</p> <p>⑦ 流儀、芸風などをいう場合。</p> <p>⑧ 家柄、門地をいう場合。</p> <p>⑨ 得意とするもの。得意芸。お家芸。</p> <p>⑩ 「いえもと (家元)」の略。</p> <p>⑪ 「いえばり (家彫)」の略。</p> <p>⑫ 鎧の籠手 (こて) の、布帛で仕立てた部分。籠手の袋。</p> <p>⑬ 「匣」とも 箒築 (ひちりき) を入れる箱。</p> <p>⑭ 「奩」とも 鏡を入れておく箱。鏡箱。</p> <p>⑮ 小さい道具類を入れておく箱のこと。茶道では、茶入れその他茶器類の容器。</p> <p>⑯ 旧民法で、戸主の支配権で統率された戸主と家族との共同生活団体。</p> <p>⑰ 長編小説。島崎藤村作。明治四三～四四年 (一九一〇～一一) 発表。封建の大雅俗制度のゆがみと内部の淫蕩な血のために没落していく二大旧家の二〇年の歴史を描く。</p>	<p>【字音語素】</p> <p>漢</p> <p>① いえ。すまい。住居。住宅。</p> <p>② うち。いえがら。</p> <p>③ 自分の家庭。</p> <p>④ 一道を専門とする人。それにすぐれている人。行動にある特徴をもつ人。</p>	<p>(「け」は「家」の呉音)</p> <p>① 官職、称号などの下に付けて、敬意を表す。</p> <p>② 姓、氏の下に付けて、その一族またはその成員であることを示す。</p> <p>③ 宗教、学問などの系統を示す。</p> <p>④ 家屋、血筋、宗派、学派などの数を数える時に用いる。</p> <p>【字音語素】</p> <p>呉</p> <p>いえ。一族。いえがら。</p>
広辞苑	<p>① 居住用の建物。うち。</p> <p>① (普通は一家族の) 人が住むための建物。</p> <p>② 特に、自宅。わがや。</p> <p>② 同じ家に住む人々の集合体。</p> <p>① 家庭。家族全体によって形作られる集団。特に旧民法で、戸主の支配権で統率された、戸主と家族との共同体。</p> <p>② (「家のうちのあるじ」の意で) 妻。主婦。</p> <p>③ 代々仕えてきた家、またはそう見立てられるもの。</p> <p>① 祖先から伝え継がれる血縁集団。</p> <p>② 祖先から伝え来た名跡。家名・家業や芸術・武術の流儀など。家元。</p> <p>③ 代々仕えてきた主君の家筋。おいえ。</p> <p>④ 家の状態。</p> <p>① 家産。家の財政。</p> <p>② 名門。家柄。</p> <p>⑤ (出家に対し) 在家。俗生活。</p> <p>⑥ 小さな道具類を入れる箱。茶道で、茶入れなどの茶器類の容器。</p>	<p>その道の人。その道にすぐれた人。また、そのような性質・傾向の人である意を表す。→け (家)</p>	<p>(呉音) 身うち。一族。→か (家)</p>
大辞泉	<p>① 人の住むための建物。すまい。家屋。</p> <p>② 自分の住んでいる建物。うち。自宅。</p> <p>③ 夫婦・親子・兄弟など血縁の近いものが生活を共にする小集団。家庭。所帯。</p> <p>④ 祖先から代々続いてきた血族としてのまとまり。また、その伝統的な名誉や財産など。家名。家督。</p> <p>⑤ 家族集団の置かれている社会的地位。家柄。</p> <p>④ 特に、よい家柄。</p> <p>⑥ 民法旧規定における家制度で、戸主の統轄のもとに、戸籍上一家をなしている親族の団体。</p> <p>⑦ 妻。</p> <p>⑧ 出家に対して、在家。在俗。</p>	<p>① 人の住む建物。</p> <p>② 血縁集団の生活の場としての家。一家。一族。</p> <p>③ 自分の家の。</p> <p>④ その道を専門にする人。一事に秀でた人。</p>	<p>(接尾) ① 姓氏に付いて、その一族またはその成員であることを表す。</p> <p>② 官職・称号などに付いて、敬意を表す。</p>
大辞林	<p>① 人が住むための建物。住居。家屋。</p> <p>④ 自分のうち。我が家。自宅。</p> <p>② ⑦ 夫婦・親子・兄弟などからなる生活共同体。社会を構成する最小単位。家族。</p> <p>④ 民法旧規定において、一家として戸籍に登録された親族の団体。戸主とその統率を受ける家族から構成され、戸主は戸主権に基づいて家族の居所指定や身分行為の許諾などを行なった。現行民法の実施により廃止されたが、戸籍制度や社会慣習に現在もその影響が残る。家制度。</p>	<p>漢</p> <p>① いえ。人のすまい。</p> <p>② 一族。一門。</p> <p>③ 家から。</p> <p>④ 自分のうち。</p> <p>⑤ 一つの領域を専門とする人。また、それに優れた人。</p> <p>⑥ ある特性を備えた人。</p>	<p>(接尾) (呉音)</p> <p>氏・姓・官職・称号などに付いて、それに所属するものの意を表す。また尊敬の意を添える。</p> <p>漢</p> <p>→か「家」漢</p>

	<p>③祖先から子孫へと、血縁によってつながる家筋・家計。それによって守り伝えられた伝統・技芸・財産なども含めていう。</p> <p>④鏡・茶器などの器物を入れる容器。</p> <p>⑤「家地いえじ」に同じ。</p> <p>⑥立派な血統。名門。</p> <p>⑦「妻」の婉曲な表現。</p> <p>⑧（出家に対し）在家。俗世間。</p> <p>⑨書名（別項参照→家 長編小説。島崎藤村作。一九一一年（明治四年）刊。由緒ある二つの旧家の没落する過程をたどり、家族制度の因習や宿命的な血の問題を描く）</p>		
<p>角川必携国語辞典</p>	<p>①人が住むための建物。家屋。うち。わがや。</p> <p>②家庭。家族。</p> <p>③家系。</p>	<p>①人の住む建物。すまい。いえ。</p> <p>②血のつながりのある人々。一族。</p> <p>③その道にすぐれた人。また、それを職業とする人。</p> <p>④ある性向や特性をもつ人。</p>	<p>→「か」家</p>
<p>新明解国語辞典</p>	<p>①私的な生活を営む場として、（家族と共に）そこで寝起きし、自由に使える時を過ごす所（ための建物）。</p> <p>②親子・兄弟などの関係で結ばれている人びとの集まり。また、その系統。</p>	<p>【字音語の造語成分】</p> <p>①人の住む建物。</p> <p>②その人の、うち。</p> <p>③一門。一族。</p> <p>④何かの点で世に知られている人。</p> <p>⑤すぐれた専門的△知識（技術）や卓抜な着想をもって世人に知られている人たちをかぞえる語。</p>	<p>①（接尾）身分のある家柄であることを表す。（広義では、普通のなんでもない家柄についても言う）</p> <p>【造語成分】</p> <p>①家</p> <p>②…の家柄の人。…の家系。→（本文）け【家】</p>

表3-4. 間（はざま、ま、あいだ、かん）の語義記述比較表

字	間			
語	はざま	ま	あいだ	かん
<p>日本国語大辞典</p> <p>間 姓氏の一つ。</p>		<p>I <名></p> <p>①空間的にいう。</p> <p>①ある物の存在する近くの空間を漠然とさしていう。そば。あたり。</p> <p>②二つ以上の同質の物のあいだにある空間。あいだ。あわい。</p> <p>③連続して並んでいるようなものの中間の、あいている空間。すさま。転じて、人と人との関係に生じた間隙。</p> <p>④建物の柱と柱の間。</p> <p>④建物の居住区で二本の柱を一辺とする部分。</p> <p>⑤柱間と規格化された畳の寸法との関係を示す名。「京間」「江戸間」など。</p> <p>⑥部屋などの一区切り。古代の家屋は、部屋としての独立した構造を持たないことが多いので、几帳、障子、襖などで区切られた一区間をさしていい、前項の例と区別しがたい場合も多い。部屋がそれぞれ独立して作られるようになると、主として部屋をさしていう。「居間」「次の間」「床の間」など。</p> <p>⑦「ま（澗）」に同じ。</p> <p>⑧時間的にいう。</p> <p>①ある限定された時間的なひろがり。</p> <p>②ある動作・状態が継続している時間帯。間（かん）。</p> <p>③継続していたものが途切れたり中断したりする時間。絶え間。</p> <p>④何かをするのに振り当てる時間。機会。</p> <p>⑤邦楽・舞踊・演劇で、音と音、動作と動作の間の休止の時間的長短をいう。転じて、拍節・リズム・テンポと同意に用いる。</p> <p>⑥めぐりあわせ。運。</p> <p>II <接尾></p> <p>①柱と柱の間を単位として数える時に用いる。実際の長さは一定しないが、六尺から一〇尺くらいをさす。室町時代には七尺ないし六・五尺であった。</p> <p>②II①から、建物や部屋の広さをいうのに用いる。一間は、たてよこ一間に一間の広さをいい、五間といえば二間に二間半の広さをいう。</p> <p>③部屋の数を数えるのに用いる。「三間の家」</p>	<p>①二つのものにはさまれた部分。</p> <p>①空間的に、二つのものにはさまれた部分。物と物とのま。中間。あいま。あわい。</p> <p>②時間的に、二つの部分にはさまれた時。時間の連続の切れた部分。絶え間。間隔。</p> <p>③人と人との関係。事物相互の関係。間柄。仲。</p> <p>④人と人の間柄が悪くなった状態。紛争。</p> <p>⑤二つ以上のもののうちの範囲を表す。…のうち。…の中で。</p> <p>⑥あるひとまとまりの部分。</p> <p>①空間のへだたり。距離。</p> <p>②時間的に、限られた範囲。</p> <p>④時の経過におけるある範囲。期間内。うち。ほど。</p> <p>⑤特別の時間でない、普通の時。なんでもない時。</p> <p>⑥形式名詞化して用いられる。</p> <p>①（接続助詞のように用いて）原因、理由を示す。…によって。…が故に。…ので。</p> <p>②「この間」の形で、漠然とした時を表す。</p>	<p>① <名></p> <p>①物や人、または、場所などのそれぞれのあいだ。間隔。また、その空間。</p> <p>②事と事との時間的なへだたり。また、一続きの時間。</p> <p>③人や物事のあいだの関係。仲（なか）。</p> <p>④よい機会。しお。</p> <p>⑤心のへだたり。仲たがい。</p> <p>⑥まわしもの。間諜（かんちょう）。</p> <p>⑦ <接尾>ある時間、場所、人、物と、他の時間、場所、人、物とのあいだをいう。</p> <p>【字音語素】</p> <p>漢</p> <p>①物と物とのあいだ。ある範囲のなか。</p> <p>②ひま。「閑」に同じ。</p> <p>③ひそかにうかがう。</p>

		④一定の区切られた空間を数えるのに用いる。障子の棧で囲まれた一区切など。	
広辞苑	姓氏の一つ。	①物と物、または事と事のあいだ。あい。間隔。 ②あいだの空間。すきま。 ③あいだの時間。ひま。いとま。 ④特に、人のいないあいだの意を表す ⑤ある事にあてて一続きの時間。 ⑥長さの単位。 ⑦家など、建物の柱と柱のあいだ。けん。 ⑧畳の寸法という語。京間は曲尺で六尺三寸と三尺一寸五分、田舎間は五尺八寸と二尺九寸。 ⑨家の内部で、屏風・ふすまなどによって仕切られたところ。 ⑩家のしきりをなしている室。へや。 ⑪室町時代、部屋の広さの単位。坪。 ⑫部屋の数を数える語。 ⑬日本の音楽で、拍と拍のあいだ。また、特定の拍や時点。転じて、全体のリズム感。 ⑭芝居で、余韻を残すために台詞と台詞の間に置く無言の時間。 ⑮ほどよいころあい。おり。しおどき。機会。めぐりあわせ。 ⑯その場の様子。ぐあい。ばつ。 ⑰船の泊まる所。ふながかり。	①二つのものに挟まれた部分。物と物とに挟まれた空間・部分。 ②時間のへだたり。絶え間。 ③ここからあそこまで一続きの空間・時間。 ④二つ（以上）のもののかかりあい、結びつき。関係。仲。 ⑤空間・時間上の（大体の）範囲。うち。 ⑥（接続助詞的に）…ゆえ。…から。…ので。
大辞泉	(古くは「はさま」) ①物と物との間の狭い所。すきま。 ②谷。谷間。 ③ある事柄と次の事柄との間の時期。 ④城壁に設けた、矢や鉄砲を発射するための小穴。矢狭間。鉄砲狭間。	①〈名〉 ①物が並んでいるときの空間。あいだ。あい。すきま。 ②家のひと区切りをなしている部屋。 ③畳の大きさを表す名称。 ④連続している事と事のあいだの時間。 ⑤話の中に適当にとる無言の時間。 ⑥邦楽・舞踊・演劇などで、拍と拍、動作と動作、せりふとせりふなどのあいだの時間的間隔。転じて、リズムやテンポの意に用いる。 ⑦ちょうどよい折。しおどき。ころあい。機会。 ⑧その場のようす。その場のぐあい。 ⑨家などの柱と柱との間。けん。 ⑩〈接尾〉助数詞 ①部屋の数を数えるのに用いる。 ②柱と柱のあいだを単位として数えるのに用いる。 ③建物や部屋の広さをいうのに用いる。 ④障子の棧で囲まれた一区切りなど、一定の区切られた空間を数えるのに用いる。	①二つのものに挟まれた部分や範囲。あいま。 ②ものともを隔てる空間、または時間。感覚。あいま。 ③ある範囲の一続きの時間。 ④物事・現象などの相対するものの関係。 ⑤人と人との相互の関係。間柄。仲。 ⑥ある限られた集合や範囲。…の中。 ⑦ある範囲内における双方からみた中間。 ⑧（接続助詞的に）用いて原因・理由を表す。現代では文語文の手紙などに用いる。ゆえに。から。ので。
大辞林	間 姓氏の一。 狭間・迫間・間 (古くは「はさま」) ①物と物との間の狭くなったところ。あいだ。 ②〔「隘」とも書く〕谷あい。谷間。 ③城壁に設けた、弓・鉄砲などを射つための穴。銃眼。 ④事と事の間。間の時間。	I 〈名〉 ①空間的な間隔。 ①物と物とのあいだの空間。すきま。 ②家屋内の一区切り。部屋。古代では、几帳・障子などで区切られた区画も「ま」と呼んだ。 ③ある物の位置する空間を漠然とさす語。あたり。 ④建物の柱と柱のあいだ。 ⑤時間的な間隔。 ①事と事とのあいだの時間。ひま。 ②事が継続しているあいだの時間。ある状態が続いているあいだ。 ③日本の伝統芸能（音楽・舞踊・演劇など）で、拍と拍（動作と動作）のあいだの時間的間隔。転じて、リズムやテンポの意にも用いられる。 ④適当な時期。機会。しおどき。 ⑤その場の具合。雰囲気。 II 〈接尾〉助数詞。 ①部屋の数を数えるのに用いる。	①二つのものにはさまれた、あいている部分。中間。 ②ある範囲によって限られた一続きの時間。 ③ものともを隔てる空間、または時間。間隔。へだたり。ま。 ④相対する二つの対象の関係。 ⑤複数の物事が構成する一つのまとまり。 ⑥人と人、ものともとの関係。間柄。仲。 ⑦二つのものの平均。中間。 ⑧大体の範囲。およその見当。あたり。頃。 ⑨二つの物事のうちどちらか。 ⑩（形式名詞）活用語の連体形に付いて、接続助詞のように用いる。記録体・和漢混交文に多く用いられる。 ⑦単に前の叙述を後の叙述に続ける。ところ。 ④前の叙述が後の叙述の理由・原因であることを表す。ゆえに。

		<p>②柱と柱のあいだを単位にして数えるときに用いる。実際の長さは一定せず、平安時代には一〇尺ほどであったが、十五世紀末頃に六尺五寸が多く用いられ、土木における長さの基準となった。これに対し徳川幕府が一六四九年に一間（ひとま）を六尺と定めてから主に関東・東北地方で用いられるようになり、しだいに「けん（間）」が長さの単位として定着してきた。</p> <p>③建物や部屋の広さをいうのに用いる。Ⅱの②の長さをいう「ま（間）」をもととし、縦一間・横一間の広さを一間とする。</p> <p>④障子の棧で囲まれた一区切りなど、一定の区切られた空間を数えるのに用いる。</p>	
角川必携国語辞典	なし	<p>①〈名〉①ものともとのあいだ。 ②時間と時間のあいだ。 ③ちょうどいいころあい。 ④へや。ざしき。 ②〈造語〉部屋を数えることば。また、一間の長さ。</p>	<p>①ものともとの、時間と時間とにはさまれているところ。 ②ものともとのへだたり。 ③時間の経過。ほど。 ④ある範囲内の連続した時間。 ⑤ある仲間の範囲内。 ⑥人と人、ものともとの関係。仲。 ⑦中間。平均。まんなか。</p>
新明解国語辞典	<p>①物と物との間の狭くなった所。あいだ。 ②谷あい。 ③城壁に造った、弓・鉄砲をうつための穴</p>	<p>①何かのあいだにはさまれた空間・時間。 ②〔聴衆や観衆に、個々の場面や状況を強く印象づけるために〕連続して行われる話や演技・演奏の中に設ける微妙な時間的空白。 ③A部屋。 B Aを数える語。</p>	<p>①A直接続かない二つの点（物）の非連続部分に存在する空間・時間など。 B問題や関係などのある双方に属さないもの。あい。 ②A一続きの時間・空間。 B仲間うちとしての人間関係。</p>

表 3-5. 巻（かん、まき）の語義記述比較表

字 語	巻	
	かん	まき
日本国語大辞典	<p>①〈名〉 ①巻き物。巻き軸。卷子本（かんすほん）。 ②（古くは書物は巻き物になっていたところから）書籍。本。また、<u>書籍の一冊のまとまり</u>。 ②〈接尾〉 ①書籍、巻き物の数をかぞえるのに用いる。 ②書籍の冊数や一冊の内の区分を示すのに用いる。 ③テープや映画のフィルムなどの数を数えるのに用いる。映画の一卷は普通一〇〇〇フィート（約三〇五メートル）。 『字音語素』 呉 ①まきもの。 ②書物。ほん。 ③巻きもの、その他書物の仕立ての区分を数えるときの語。</p>	<p>①〈名〉（動詞「まく（巻）」の連用形の名詞化）巻くこと、また巻いた状態のものをいう。 ①巻くこと。巻きたや、巻いた程度を表わす。「巻きが強い」など。多くは他の語と熟して用いる。「左まき」「簀（す）まき」など。 ②書画などの巻物。巻物の一軸ごとをさしていう。後には、冊子の形態をとっていても、「上の巻」「下の巻」などと呼ぶように、書物の区分についていう。 ③連歌・俳諧で、歌仙（三十六句）、世吉（四十四句）、百韻などの連句一巻のこと。 ④「まきいた（巻板）」の着。 ⑤粽（ちまき）をいう女房詞。 ⑥「まきぞめ（巻染）」の略。 ⑦「おだまきむし（学環蒸）」の略。 ⑧兵児帯（へこおび）をいう、てきや・盗人仲間の隠語。 ②〈接尾〉巻いたものを数えるのに用いる。 ①巻いて一区切りとした状態のものを数えるのに用いる。 ②特に書物を数えるのに用いる。のちには巻物仕立てでないものにもいう。 ③巻いた回数を数えるのに用いる。「二まき巻く」</p>
広辞苑	<p>①まきもの。 ②書物。ほん。 ③書籍やその区分を数える語。 ④映画フィルムの長さの単位。通常の劇場上映用三五ミリ・フィルムでは、三〇五mmで約一分間映写できる。</p>	<p>①巻くこと。巻いたもの。 ②書画の巻物。転じて書籍、また、その区分。 ③俳諧の付き合いを長く続けたもの。また、その書きもの。 ④茅巻 ⑤巻染の略 ⑥巻いたものを数える語。また、巻いた回数を数える語。 ⑦書物の巻数を数える語。 『巻』 姓氏の一つ。</p>
大辞泉	<p>①〈名〉 ①巻物。巻物にした書物。卷子本。 ②書物。書籍。 ③何冊か合わせてひとまとまりとなる書籍の、その一つ一つ。 ②〈接尾〉助数詞。 ①書籍の冊数をかぞえるのに用いる。 ②巻数やテープ・フィルムなどの数をかぞえるのに用いる。</p>	<p>①〈名〉 ①巻くこと。また、巻いた程度。 ②書画の巻物。また、その区分。冊子になったものの区分にもいう。 ③俳諧の付き合いを長く続けたもの。また、その書き物。 ④「茅巻ちまき」を略していう女房詞。 ②〈接尾〉助数詞 ①巻いた回数を数えるのに用いる。 ②巻き物や書物の数を数えるのに用いる。</p>

大辞林	<p>① 〈名〉 ① 卷子本かんすぼん・巻軸などの<u>巻物</u>。 ② 書物。本。 ② 〈接尾〉助数詞。 ① 書籍・巻物を数えるのに用いる。 ② 全集やシリーズものなどの本の、数や順序を数えるのに用いる。 ③ 小説などの一区切りを表すのに用いる。章。編。 ④ 映画フィルムの個数および長さを表すのに用いる。普通、上映時間一〇分程度を一巻とする。 ④ 磁気テープ・カセット・テープなどを数えるのに用いる。</p>	<p>① 〈名〉(動詞「巻く」の連用形から) ① まくこと。まいた物。また、まいた状態。 ② 書画の<u>巻き物</u>。 ③ 書物が内容上いくつかに分かれている場合の、それぞれの区分。 ④ 俳諧の付合を長く続けたもの。 ⑤ (女房詞) 茅巻(ちまき) ② 〈接尾〉助数詞。 ① 巻き物や書物の数を数えるのに用いる。 ② 巻いた回数を数えるのに用いる。 巻 姓氏の一。</p>
角川必携国語辞典	<p>① 書物。まきもの。 ② もののまわりに、ぐるぐるとからみつける。また、まるめる。うずをえがいてまわる。まく。 ③ 書物や巻いたものの数や順序を数えることば。</p>	<p>① ① 巻くこと。また、巻いた程度。 ② 巻きものや書物。また、その区分。 ② 〈造語〉書物や書画の巻数を数えることば。また、巻いた回数や巻いたものを数えることば。</p>
新明解国語辞典	<p>まきもの。 (広義では、書物一般を指す) → 【造語成分】 書物・書籍・フィルム・ビデオテープなどをかぞえる語。 → (本文) かん【巻】</p>	<p>(動詞「巻く」の連用形の名詞用法) ① 【巻(き)】巻くこと。巻いた程度。 ② 【巻(き)】書画の巻物。(巻物・書物や、糸・細引き・セロテープ・蚊取線香・冷や麦など、総じて巻いた状態にある物をかぞえる時にも用いられる) ③ 【巻】書物などの、内容上の大きな区分。</p>

表 3-6. 気質 (かたぎ、きしつ) の語義記述比較表

字 語	気質	
	かたぎ	きしつ
日本国語大辞典	<p>① 風習。ならわし。また、物事のやり方や生活態度。 ② 顔やからだの様子。容姿や身のこなし。 ③ 性質。また、<u>気だて</u>。 ④ (身分、職業、地位、年齢などを表す名詞に付けて、接尾語のように用いる) それに応じた特有の、類型的な気風。</p>	<p>① 生まれながらの気性。また、人に接したりする態度などに現れる、その人の心の持ち方。<u>気だて</u>。 ② 程朱学派で、人間の理念的な存在としての面に対して、さまざまな気によって構成される物質的、現実的な面をいう。</p>
広辞苑	<p>① 物事のやり方。習慣。ならわし。 ② 顔やからだの様子。また、性質や<u>気だて</u>。 ③ 身分・職業・年齢などに相応した特有の類型的な気風。</p>	<p>① きだて。かたぎ。気性。 ② 中国で、気によって形成される実質。主に人間の身体的性質・個性をいう。 ③ 個人の性格の基礎になっている遺伝的・生物学的な一般的感情傾向または性質。古くは多血質・憂鬱質・胆汁質・粘液質の四類型に分類する試みがあるが、今日では精神医学上の分類や生物統計による分類などがある。</p>
大辞泉	<p>(「形木」から) ① 身分・職業・年齢層・環境などを同じくする人たちの間にみられる、特有の気風・性格。 ② 習わし。慣習。 ③ 容姿、または、性質・<u>気だて</u>。</p>	<p>① 気だて。気性。かたぎ。 ② 中国で、万物を構成する物質である気によって形成される物の性質。 ③ 心理学で、個人の性格の基礎にある、遺伝的、体質的に規定されたものと考えられている感情的傾向。</p>
大辞林	<p>(「形木」から生じた語) ① ある身分・職業・環境などに人に特有の気性。多く他の語と複合して用いる。 ② その人の感情や行動に表れる特有の傾向。気性や習慣。</p>	<p>① 言動に表れる、その人の身に備わった性質。<u>気だて</u>。<u>かたぎ</u>。 ② 中国で、万物を構成する物質である気の集散運動によって形成される個体をいう語。特に、宋学では、人間の肉体および肉体に固有の心理的・生理的素質のこと。 ③ 【心】人の性格の基礎をなす感情的反応の特徴。遺伝的・生理的規定が強いとされる。多血質・憂鬱質・胆汁質・粘液質の四分類のほか、心理学・生理学などに基づく種々の分類がある。 (英語 temperament の訳語として明治後期に心理学や哲学の用語として用いられる。)</p>
角川必携国語辞典	<p>(「～かたぎ」の形で) 同じ身分・職業・年代の人に共通してみられる型にはまった性格。</p>	<p>① 個人の性格を形成する、感情面での特有の性質。 ② ある職業や集団などに特有な、ものの考えかたや生きかた。<u>かたぎ</u>。</p>
新明解国語辞典	<p>(型として受けとれた気質、の意) その職業・階層の人たちに共通に見られる、思考の型や心理的傾向。</p>	<p>① 先天的な体質に関係のある感情・性質 (の型)。 ② <u>かたぎ</u>。</p>

表 3-7. 球 (きゅう、たま) の語義記述比較表

字 語	球	
	きゅう	たま
日本国語大辞典	<p>① まりのように丸いもの。<u>たま</u>。 ② 空間における、行って移転から等距離にある点全体から成る曲面 (球面)、あるいはそれによって囲まれた立体 (球体)。 『字音語素』 漢 ① <u>たま</u>。まるい形のもの。 ② まり。<u>ボール</u>。 ③ ボールを用いる競技。 ④ 野球のこと。 ⑤ 野球で投げたボール。</p>	<p>① <名> (「たま (魂)」と同語源) ① 球体あるいはそれに近い形の美しく小さい石などで、装飾品となるものを総称していう。古くは、呪術的な要素を伴うものもあり、鉱物に限らず、動植物製のものを広く含めていう。 ② 特に真珠をさしていう。まだま。しらたま。 ③ その形が①に似ているものをいう。 ④ 水の玉の意で、露、水滴、水泡、または涙などをさしていう。 ㊦ (「弾・弾丸」とも書く) (初期のものは丸くなっていたところから) 弾丸。 ㊦ そろばんの五珠と一珠。 ㊦ 電球。</p>

		<p>⑥レンズ。特にめがねのレンズ。カメラのレンズをいう。</p> <p>⑦遊戯やスポーツに用いる球形のもの。ボール。または、その動き。</p> <p>⑧玉突きに用いる球。転じて、玉突きのゲームをもいう。撞球（どうきゅう）。ビリヤード。</p> <p>⑨男子の生殖器。「きんたま」の略。</p> <p>⑩一般に、玉状にまとめたものを一括していう。「うどんの玉」「毛糸の玉」など</p> <p>⑪紋所の名。①の形にかたどったもの。玉、三つ割り玉、火燭の玉。曲玉など。</p> <p>⑫①のように美しいもの、貴重なものの意。</p> <p>⑬美しい女性。また、女性の美貌。</p> <p>⑭転じて、遊女、芸者などのこと。</p> <p>⑮すぐれた人、気のきいた者。</p> <p>⑯大事な人や物。話題や事件の焦点となっている人物や物。そのもの。そいつ。</p> <p>⑰（④から転じて）一般に人や物をそれとさしていう。</p> <p>⑱そういう人物、その程度の人物の意で用いる。軽くあざけていう場合が多い。</p> <p>⑲策略などの手段に用いるもの。ひと、物、金銭などについていう。また、単に現物、あるいは資金としての現金などをさしていう。</p> <p>⑳蕪蕪（こんやく）をいう女房詞。</p> <p>㉑「親玉」の略。親玉。第一のもの。第一人者。</p> <p>㉒「たまご（卵）」の略</p> <p>㉓魚をすくい捕る小型の網、漁網（たも）のこと。すくいだま。たもあみ。</p> <p>㉔網（つな）をいう。</p> <p>㉕「玉門（ぎょくもん）」の略とも、「船玉（ふなだま）」の略ともいう女性の陰部のこと。</p> <p>㉖「玉落ち」での、まるめた紙片のこと。江戸時代、蔵宿で地行米を下げ渡す際、受取人の姓名を書いた紙片をまるめて箱に入れ、それを振ってこぼれた紙玉の名前の人から順に渡した。転じて、地行米をいう。</p> <p>㉗下女の通称。下女の一般的な名「お玉」から。江戸時代、京都地方を中心に用いられた語。</p> <p>㉘盗人仲間の隠語。</p> <p>㉙金・銀・宝石・時計などをいう。</p> <p>㉚にぎり飯をいう。</p> <p>㉛目ぼしをつけられた人をいう。</p> <p>㉜ < 語素 ></p> <p>㉝名詞の上に付けて接頭語的に用いる。美しいもの、すぐれているものをほめていう。</p> <p>㉞特に上代、神事や高貴な物事についてのほめことばとして用いる。「玉の」の形で用いることも多い。</p> <p>㉟①①のようにきれいなもの、あるいはそれをちりばめたものの意を添える。「玉の」の形で用いることも多い。</p> <p>㊱名詞と熟合して球状のものである意を添える。</p> <p>㊲評価を表わすことばと熟合して、そういう人物である意を添える。</p>
<p>広辞苑</p>	<p>①まるい形。まるいもの。たま。まり。ボール。</p> <p>②野球の略。</p> <p>③野球で、投手が投げた球を数える語。</p> <p>④三次元空間で一定点から一定の距離 r 以内にある点全体の集合。その一定点を中心、r を半径（の長さ）という。球の表面積・体積はそれぞれ $4\pi r^2$、$(4/3)\pi r^3$ である。球体。</p>	<p>①美しい宝石類。多くは彫琢して装飾とするもの。</p> <p>②真珠。しらたま。</p> <p>③美しいもの、大切なもの、またはほめて言う意を表す語。</p> <p>④まるいもの。球形のもの。</p> <p>⑤まり。ボール。</p> <p>⑥鉄砲の弾丸</p> <p>⑦電球。</p> <p>⑧卵。</p> <p>⑨露・涙などの一しずく。</p> <p>⑩そろばんの、動かす部分。</p> <p>⑪レンズ。</p> <p>⑫きんたま。</p> <p>⑬手段に使用するもの。</p> <p>⑭木を丸太のまま幾つかに切ったその一切れのこと。最も根に近いものは元玉、次を二番玉という。</p> <p>⑮美しい女。転じて、芸妓・娼妓など客商売の女の称。</p> <p>⑯人品・器量の見地から人をあざけていう語。</p> <p>※一般的には「玉」と書き、4⑰⑱には、ふつう「球」を使う。124⑲では「珠」も用いる。</p>
<p>大辞泉</p>	<p>①丸いもの。たま。</p> <p>②空間の一定点から一定の距離にある点の軌跡。その定点を球の中心、一定距離を球の半径という。</p>	<p>① < 名 ></p> <p>②球体・楕円形、またはそれに類した形のもの。</p> <p>③球体をなすもの。</p> <p>④丸くまとめられたひとかたまり。</p> <p>⑤レンズ。</p> <p>⑥球技などに用いるボール。まり。また、投球などの種類。</p> <p>⑦玉突きの球。転じてビリヤードや、そのゲームをいう。</p> <p>⑧電球。</p> <p>⑨そろばんで、はじく丸い粒。そろばんだま。</p> <p>⑩「弾」「弾丸」とも書く）鉄砲の弾丸。</p> <p>⑪鶏卵。玉子。</p>

		<p>②㊦丸い形の美しい石の総称。宝石や真珠など。 ④極めて大切に思う貴重なもの。 ⑦張りがあって美しく、清らかなもの。 ③人を丸め込むために策略の手段として使う品物・現金。 ④美しい女性。また、転じて芸者・遊女。 ⑤あざけりの気持ちで、人をその程度の人物であるときめつける語。やつ。 ⑥〔金玉〕の略) 翠丸。 ⑦紋所の名。②㊦を圖案化したもの。 ㊦〈接尾〉名詞に付く。 ①神事や高貴な物事に付いて、それを褒めたたえる意を添える。 ②玉のように美しいもの、玉をちりばめたものなどの意を添える。</p>
大辞林	<p>①〈名〉 ①丸いもの。たま。 ②【数】ある点から一定の距離にある点の全体がつくる空間図形。 ③〈接尾〉助数詞。野球などで、投手がボールを投げた回数を数えるのに用いる。漢 ①たま。たまのような形のもの。 ②ボール。また、球技。 ③特に、野球。</p>	<p>玉・珠・球・弾 ①球形のもの。 ㊦丸い形状のもの。また、丸い形状にしたもの。〈玉〉 ④特に、水滴・涙など球状のもの。〈玉〉 ㊦球技に用いるボール。〈球〉 ㊦〔彈丸〕とも書く) 鉄砲や大砲の彈丸。〈彈〉 ㊦電球。〈球〉 ㊦真空管。〈球〉 ㊦眼鏡などのレンズ。〈玉〉 ㊦算盤の玉のこと。〈玉・珠〉 ㊦翠丸。きんたま。〈玉〉 ②〔璧〕とも書く) 丸い形をした美しい宝石。〈玉・珠〉 ㊦みがいた鉱石や真珠など。 ④転じて、価値あるもの、すぐれたもの、いつくしむべきもの、などのたとえにいう語。 ③女性のこと。また、女性の美しさ。〈玉〉 ④芸者や遊女など客商売の女性。〈玉〉 ⑤人物。その人品や器量をうんぬんする時にいう語。あざけっていう場合にも用いる。〈玉〉 ⑥計略・策略などの手段に用いる、人や金銭。 ⑦「玉落ち」に使う丸めた紙。 ⑦名詞の上に付けて接頭語的に用いる。〈玉〉 ㊦美しいもの、すぐれているものをほめていう。 ㊦球状のものである意を添える。</p>
角川必携国語辞典	<p>①丸いたまの形をしているもの。 ②ボール。また野球で、投手が投げるたまを数えることば。 ③「野球」の略。</p>	<p>①野球やゴルフなどの<u>ボール</u>。 ②電球。</p>
新明解国語辞典	<p>シャボン玉のような形。(幾何学では、三次元空間において、一定点 [= 中心] から一定の距離以下にある点全部から成る立体。広義では、球体をも指す) →【造語成分】 ①ボール・メロンなどのように丸い形をしたもの。 ②㊦ (スポーツ一般で) <u>ボール</u> (を使う競技)。 ㊦野球 (で、投げたり打ったりしたボール)。(投球の数をかぞえるのにも用いる。) ③球根をかぞえる語。 → (本文) きゅう【球】</p>	<p>「玉 (たま)」に記述 - 省略 - ㊦丸い形のもの。〔具体的には、電球・彈丸・レンズ・球根、球技の<u>ボール</u>や、球技などに使う小さい丸いものの通称として用いられる。また、ゆでたうどん・そばの<u>かたま</u>りや果実・野菜・卵をかぞえる時にも用いられる〕 - 省略 - ㊦のうち、球形の物は「球」とも書く。 - 省略 -</p>

表 3-8. 金 (かね、きん) の語義記述比較表

字 語	金	
	かね	きん
日本国語大辞典	<p>①<u>金属 (金・銀・銅・鉄など) の総称</u>。また、その原料の<u>鉱石、鉱物</u>。 ②貨幣。金銭。金子。 ③「かねじゃく (巻尺) ①」に同じ。 ④①でできたもの。金物。金具。 ⑤「かねしょう (金性) ①」の略。 ⑥金箔 (きんぱく)。 ⑦〔「かね」とも〕強盗の使う<u>凶器</u>、また、すりの使う刃物をいう隠語。</p>	<p>①〈名〉 ①古来、五金 (金・銀・銅・鉄・錫) の長として尊重されてきた、美しい黄金の光沢がある金属元素の一つ。文武天皇大宝元年 (七〇一) に対馬国から朝貢されたのが歴史に見える古例である。 塊状では美しい黄金の金属光沢、粉末状では紫、コロイド状では赤、溶融状態では緑、箔状では緑から青に見える。主として、石英脈中の自然金、または川の砂中の砂金など単体として産出する。工業的には、比重選鉱法、青化法などで製錬して得られる。化学的にきわめて安定で、王水、塩素水にとけて塩化金酸に、また水銀と化合してアマルガムとなるが空気、水、酸素、硫黄などとは反応せず、普通の酸やアルカリにおかされないうえ、重く軟かで延性、展性に富むので種々の細工に適し、貴金属の中でも特に珍重され、貨幣、装飾品として用いられている。化学記号 Au 原子番号七九。原子量一九六・九六七。比重一九・三。おうごん。こがね。きがね。くがね。 ②石に対して、<u>金・銀・銅・鉄・錫などの鉱物の総称</u>。金属。かね。 ③ (金を貨幣の材料として用いたところから) 金貨。また<u>貨幣</u>。 ④大判、小判、一歩金 (いちぶきん) などの金貨の総称。 ⑤貨幣。金銭。かね。現在は、「金一 (円)」などの形で、金額の上につけて用いることが多い。 ⑥「きんしょう (金将)」の略。 ⑦「きんし (金糸) ①」の略。 ⑧「きんぱく (金箔) ①」の略。</p>

		<p>⑦「きんいろ（金色）」の略。 ⑧擧丸（こうがん）。きんたま。 ⑨五行の第四。時節では秋、方位では西、五音（ごいん）では商、十干では庚辛、天体の五星では金星にあたる。 ⑩「きんよう（金曜）①」の略。 ⑪「きんよう（金曜）②」の略。</p> <p>②</p> <p>①女真族が満州、華北に建てた王朝。完顔部の阿骨打が女真族を統一し、一一一五年遼から独立して建国。のち、遼を滅ぼし、宋を南に追って華北に中国的な中央集権の専制政治を行った。首都ははじめ会寧府、のち燕京、汴京。一〇代一二〇年でモンゴル帝国に滅ぼされる。</p> <p>②→こうきん（後金）</p> <p>③<接尾>金の純度を示す単位。二十四金が純金。</p> <p>『字音語素』</p> <p>漢</p> <p>①かね。かなもの。武器。 ②きん。こがね。おうごん。きんいろ。 ③金の純度を示す単位。 ④りっぱな、貴重な、美しいなどの形容。 ⑤おかね。ぜに。通貨。 ⑥中国の王朝の名。 ⑦将棋の駒「金将」の略。 ⑧七曜の一つ。 ⑨五行の一つ。西。秋。</p>
<p>広辞苑</p>	<p>①金属の総称。金・銀・鉄・銅など。また、金属製品。金具。 ②（近世、上方では貨幣に銀を用いたので多く「銀」の字を当てた）貨幣としての黄金など。金銭。</p>	<p>①（gold）金属元素の一種。元素記号 Au 原子番号七九。原子量一九七・〇。石英鉱脈中または川の砂中に単体として産し、銅鉱・鉛鉱などにも含まれる。黄色の輝きのある金属。重く軟らかで、延性および展性に富む。空気中で錆びず、普通の酸に侵されず、王水に溶ける。比重は一九・三。産出が少なく、光輝が美しいため随一の貴金属とされ、貨幣・装飾品・歯科治療材・電子工業部品などに用いる。南アフリカ・カナダ・ロシアなどに多く産出。こがね。おうごん。</p> <p>②立派な、固い、美しい、貴重ななどの意を表す語。 ③おかね。ぜに。貨幣。また、昔、中国で通貨の単位。 ④金額を記すとき、数字の上に冠する語。 ⑤カラットに同じ。 ⑥金メダルの略。スポーツ競技などで、第一位となること。 ⑦五行の第四。時季では秋、方位では西、十干では庚・辛に当てる。 ⑧金曜の略 ⑨こがね色。黄色。 ⑩将棋の駒、金将の略。 ⑪中国の楽器分類、八音の一つ。鐘の類。 ⑫俗語で、擧丸の称。きんたま。</p>
<p>大辞泉</p>	<p>①金属の総称。特に、金・銀・鉄・銅など。 ②貨幣。金銭。おかね。</p>	<p>①〈名〉</p> <p>①銅族元素の一。単体は黄金色で光沢がある。金属中最も展延性に富み、暑さ0.1マイクロメートルの箔にすることが可能。科学的に安定で、酸化されにくく錆びず、また、王水には溶けるが、普通の酸やアルカリにはおかされない。自然金の形で主に石英鉱脈中から産出し、母岩が風化したあと川に沈積した砂金としても得られる。貴金属として貨幣・装飾品や歯科医療材料などに使用。比重19.3。記号 Au 原子番号79。原子量197.0。こがね。黄金。</p> <p>②値打ちのあるものたえ。 ③⑦金貨。また、金銭。 ④金額を記すときに、上に付けて用いる語。 ④きんいろ。こがねいろ。 ⑤将棋の駒で、金将。 ⑥金メダル。 ⑦擧丸のこと。きんたま。 ⑧金曜日。 ⑨五行の第四位。方位では西、季節では秋、五星では金星、十干では庚・辛に配する。 ②〈接尾〉数を示す語に付いて、金の純度を表すのに用いる。24金が純金。カラット。</p>
<p>大辞林</p>	<p>①金属。金・銀・銅・鉄など。 ②金銭。おかね。</p>	<p>①（gold；ラテン aurum）11族（銅族）に属する遷移元素の一。元素記号 Au 原子番号七九。原子量一九七・〇。比重一九・三。自然金（単体の金）として主に石英鉱脈中に産する。光沢ある黄金の金属。金属中最も延性、展性が大きく、厚さ〇・一マイクロメートルの箔とすることができる。化学的にきわめて安定で、空気中で酸化せず、酸におかされないが、王水には溶ける。古来、随一の貴金属とされ、貨幣・装飾品として用いられる。こがね。</p> <p>②⑦金銭。貨幣。</p> <p>④江戸時代に用いられた大判・小判など金貨の総称。普通一両をさす。 ③金額を書くときに上に冠する語。 ④金の純度を示す単位。二十四金を純金とする。 ⑤金の色。金色きんいろ。こがね色。 ⑥将棋の駒の一。「金将」の略。</p>

		<p>⑦五行の第四。季節では秋、方位では西、色では白、十干では庚・辛、五星では金星に当てる。</p> <p>⑧七曜の一。「金曜」の略。</p> <p>⑨寧丸。きんたま。</p>
角川必携国語辞典	<p>①<u>金属</u>。</p> <p>②貨幣。金銭。おかね。</p>	<p>①金属元素の一つ。黄金のつやのある貴金属。こがね。元素記号 Au こがね色。また、黄金のように美しく貴重なもの。</p> <p>②金属。かなもの。また、非常にかたいもの。</p> <p>③かね。金額。</p> <p>④金の純度をあらわす単位。カラット。記号はK</p> <p>⑤「金曜日」の略。</p> <p>⑥将棋の駒の「金将」の略。</p> <p>⑦中国の王朝名。女真族が建てた国。一一一五 — 一二三四年。</p>
新明解国語辞典	<p>①金属。(狭義では、鉄を指す)</p> <p>②金属を取り出す鉱石。</p> <p>③<u>金銭・貨幣</u>。</p>	<p>①黄色く、つやがあって光り輝く金属元素(記号 Au 原子番号 79)。化学的にきわめて安定し、空気・水・硫黄などにおかされず展延性に富むので、貨幣や装飾品として使われる。古代から最も価値の高い貴金属とされる存在。こがね。</p> <p>②おかね。</p> <p>③「金色・将棋の金将」の略。</p> <p>②(接頭)</p> <p>金額を示す時に数の上に付ける言葉。</p> <p>→【造語成分】</p> <p>①含まれている純金の割合を示す単位。(一金は二十四分の一。従って純金は二十四金)</p> <p>②(略) 金曜日→(本文) きん【金】</p>

表 3-9. 戸 (こ、と) の語義記述比較表

字 語	戸	
	こ	と
日本国語大辞典	<p>①<名></p> <p>①と。とびら。</p> <p>②とぐち。部屋や家屋などの出入口。</p> <p>③いえ。家屋。家に住む家族。</p> <p>④戸籍。人別。へふだ。</p> <p>⑤令制で、行政上、社会組織の単位とされた家。普通は、二、三世帯を含む大家族が多い。五〇戸で一里に編成された。</p> <p>⑥酒の量。多く五素的に用いる。</p> <p>②<接尾>家の数を数えるのに用いる。</p> <p>【字音語素】</p> <p>漢 呉</p> <p>①建物の出入口。とびら。と。</p> <p>②いえ。</p> <p>③家を数える語。</p> <p>④酒を飲む量。</p>	<p>①出入りする所。出入口。戸口。かど。もん。</p> <p>②出入口、窓に取りつけて開閉できるようにしたもの。引き戸、開き戸などがある。とびら。ドア。</p> <p>③(門) 河口や海などの、兩岸が狭くなっている所。水流が出入りする所。水が流れている所。瀬戸。川戸(かわと)。水戸(みと)。</p> <p>④(戸が音をたてる) ところから) 風の吹く日をいう、盗人仲間の隠語。</p>
広辞苑	<p>①家。家族。一家。</p> <p>②家・住まいをかぞえる語。</p> <p>③律令制で、行政上の単位とされた家。</p>	<p>①家の出入口。戸口。かど。もん。</p> <p>②水流の出入りする所。水門。瀬戸。</p> <p>③建具の一つ。出入口・窓などに開閉できるようにとりつけたもの。とびら。</p>
大辞泉	<p>①<名></p> <p>①と。とびら。また、家屋の出入口。とぐち。</p> <p>②家。一家。</p> <p>③律令制で、行政上、社会組織の単位とされた家。普通は 2、3 の小家族を含む 20～30 人の大家族が多い。</p> <p>②<接尾>助数詞。家の数を数えるのに用いる。</p>	<p>①(戸) 窓・出入口などに取り付けて、開閉できるようにした建具。引き戸・開き戸などがある。</p> <p>②出入口。戸口。かど。もん。</p> <p>③水の流れの出入りする所。瀬戸。</p>
大辞林	<p>①<名></p> <p>①家の出入口。戸口。また、とびら。と。</p> <p>②家。家屋。また、一家。</p> <p>③律令制で、地方行政における社会組織の最小単位。戸籍記録・賦課の単位でもあり、里や郷を構成する。</p> <p>②<接尾>助数詞。家や世帯の数を数えるのに用いる。</p>	<p>戸</p> <p>(「門(と)」と同源)</p> <p>窓や出入口、門・戸棚などに取り付け、開閉して内部と外部を仕切ったり、出入口を閉ざしたりするための建具の総称。</p> <p>門・戸</p> <p>①家の出入口。戸口。かど。もん。</p> <p>②海峡などの、兩岸がせばまった水流の出入りする所。水門。瀬戸。</p>
角川必携国語辞典	<p>①家の出入口。と。</p> <p>②いえ。また、家を数えることば。</p> <p>③酒を飲む量。</p>	<p>建物や部屋の出入口。または窓などにとりつけて、開閉できるようにした板状のもの。とびら。ドア。</p>
新明解国語辞典	<p>【字音語の造語成分】</p> <p>①家の出入口。と。</p> <p>②社会の単位としての家。</p> <p>③建物としての「家」をかぞえる語。→軒ケン</p> <p>④飲む酒の分量。</p>	<p>【戸】家の内外を隔て(各部分を仕切)るために取りつけた開閉のきく建具。</p>

表 3-10. 工場（こうじょう、こうば）の語義記述比較表

字 語	工場	
	こうじょう	こうば
日本国語大辞典	一定の機械を設備、使用して、多数の人が継続的に商品の製造や加工に従事する所。 <u>こうば</u> 。工業所。	機械設備によって、物品の製造、加工をするところ。現在では、普通、「工場（こうじょう）」より規模の小さなものをさす。
広辞苑	機械などを使って労働者が継続的に物品の製造や加工に従事する施設。 <u>こうば</u> 。	機械などを使って、比較的小規模に物品の製造や加工をする施設。→工場（こうじょう）
大辞泉	一定の機械・器具を設備し、継続的に物品の製造や加工などを行う所。また、その建物。 <u>こうば</u> 。	→こうじょう（工場）
大辞林	物を製造・加工・修理するため、必要な機械・器具を備えて労働者が作業に従う所。また、その建物。 <u>こうば</u> 。	「こうじょう（工場）」に同じ。
角川必携国語辞典	機械を使って、ものを加工・製造するところ。	機械を使って、ものをつくり加工したりするところ。
新明解国語辞典	多くの物を生産・加工・修理するために、人や機械設備などを備える施設。 → <u>こうば</u>	「 <u>こうじょう（工場）</u> 」の、一時代前の表現。（やや小規模のものを指すことが多い）

表 3-11. 今日（きょう、こんにち）の語義記述比較表

字 語	今日	
	きょう	こんにち
日本国語大辞典	話し手が、 <u>今身</u> を置いているその日。また、別の年・月の同じ日付けの日もいう。本日。 <u>こんにち</u> 。	①話し手が今、身を置いている、その日。きょう。本日。 ②近頃。この頃。今の時代。現今。 ③「今日ある」の形で用いて、好ましい現在の状態。 ④「こんにち（今日）の天道様」の略。
広辞苑	（現在の） <u>この日</u> 。本日。 <u>こんにち</u> 。	①本日。このひ。きょう。 ②近頃。この頃。現今。
大辞泉	①今過している、この日。本日。 <u>こんにち</u> 。 ②その日と同じ日付や曜日の日。	①きょう。本日。この日。 ②今の時代。 ③現在。
大辞林	現在過しつづめる、 <u>この日</u> 。本日。	①きょう。この日。本日。 ②このごろ。現在。現代。
角川必携国語辞典	今、現実 ^に に生きているこの日。また、別の月や週の、同じ日付や同じ曜日の日。本日。	①「きょう」の改まった言い方。 ②このごろ。現在。現今。
新明解国語辞典	①今何かをして（話して）いる、その日。 <u>こんにち</u> 。 ②同じ日付（曜日）の日。	「 <u>きょう</u> 」「いま（という時代）」「 <u>現在</u> 」の改まった表現。

表 3-12. 根本（こんぼん、ねもと）の語義記述比較表

字 語	根本	
	こんぼん	ねもと
日本国語大辞典	（古くは「こんぼん」） ①〈名〉 ①草木の根。ねもと。もと。 ②物事のおこり。また、大もとの原因。根源。 ③ものごとを成り立たせている、大もとのことがら。根底。 ④もとからあるもの。 ⑤基盤となるもの。あるべき姿。標準。	①根のもと。根のある部分。また、もののつけ根の部分。また、比喩的に柱などのもとの部分。 <u>こんぼん</u> 。 ②物事の基本。 <u>こんぼん</u> 。
広辞苑	①【名】 ①草木の根。 ②物事が成り立つ、そもその大本。 ③元祖。ほんもと。 ②【副】 もともと。本来。	①根の部分。根のあたり。 ②基本となるところ。 <u>こんぼん</u> 。
大辞泉	①〈名〉（古くは「こんぼん」） ①物事が成り立っている基礎になるもの。おもと。 ②物事のおこり。 ②【副】もともと。本来。	①根のもと。根のある部分。根のあたり。 ②物事の基本。 <u>こんぼん</u> 。

大辞林	(古くは「こんぼん」) ①〈名〉 ①物事を成り立たせる基盤となっている事柄。 ②物事の始まった最初。おこり。また、本家。元祖。 ②〈副〉もともと。もとから。本来。	①植物の根のあたり。 ②柱や立っている物の、付け根の部分。 ③物事のもと。基本。
角川必携国語辞典	ものごとのもとなっている土台。おおもと。	①木や草の根の部分。 ②柱や立っているものの、つけ根の部分。 ③ものごとの根本。
新明解国語辞典	そのものの存在を成り立たせている、一番大事ななにか。	①根 (の部分)。 ②つけ根 (の部分)。

表 3-13. 際 (きわ、さい) の語義記述比較表

字 語	際	
	きわ	さい
日本国語大辞典	①物事の窮まるどころ。極限。限界。きわみ。果て。限り。 ②物と物との接するところ。境目。端。仕切り。また、そのすぐそば。ほとり。 ③物事の様相が転換するような大切な時期。天気。時。折り。当座。 ④年末及び節季の決算期。江戸時代、商家の勘定日。 ⑤物事の段階。程度。 ⑥人の所属する家紋、階級。分際。身分。家柄。 ⑦才能、器量などの程度。 ⑧物事の程度。ほどあい。 ⑨江戸以降、操り芝居などの寄席芸人、魚商、駕籠屋、車夫などが数の九をいう符丁。また、揚弓で賭物 (かけもの) をするときにも用いられた。 ⑩「きわけしょう (際化粧)」に同じ。	①物と物とが接するところ。また、あるものと他との境目。 ②ある場所の付近。ほとり。あたり。 ③ある地点と地点との間。 ④ある事柄が行われる、そのとき。時機。時節。おり。とき。場合。 ⑤「ざい (際)」に同じ。
広辞苑	①物事のきわまったところ。つきるところ。かぎり。はて。 ②物の他と接する境目。また、そのすれすれのところ。はし。かたわら。ほとり。 ③重大な時期。時。折。 ④身の位置する程度。身分。階級。分際。 ⑤程度。ほど。 ⑥年末・節季などの決算期。	①接すること。ふれあうこと。であうこと。 ②とき。おり。
大辞泉	①あと少しで別のものになろうとするぎりぎりのところ。境目。また、物の端。 ②ある物にきわめて接近した所。すぐそば。 ③物事がそうなるうとするまさにそのとき。 ④物事の窮まるどころ。限界。際限。 ⑤身分。家柄。分際。 ⑥才能・器量などの程度。 ⑦物事の程度。ほどあい。 ⑧江戸時代、年末・節季の決算期。	①とき。場合。機会。 ②物と物との接するところ。
大辞林	(ほかの語と複合して用いられるときには「ぎわ」となる) ①他との境界となるところ。物のふち。へり。はし。 ②あるものに非常に近い所。あたり。そば。 ③ある状態になろうとしている直前の時。 ④物事のきわまるどころ。極限。果て。 ⑤分際。身の程。身分。 ⑥物事の程度。特に、才能・器量などの程度。 ⑦江戸時代、盆暮れまたは各節句前の支払いの時期。	①(何かが行われる) おり。時。場合。 ②ある場所と場所との間。
角川必携国語辞典	ぎりぎりのさかいめ。また、そのそば。	①ぎりぎりまでいったところ。きわ。はて。 ②おり。場合。また、ちょうどその折に出くわす。 ③まじわる。つきあう。 ④身の程。
新明解国語辞典	①その物事が、他と境をなしている所 (の近く)。 ②(雅) 地位や身分。	これまでとは異なる現象が生じたり新たにことが行われたりする特定の時点。 →【造語成分】 ①他と接触する。 ②偶然に出くわす。 ③ぎりぎりまで行った所。→(本文) さい【際】

表 3-14. 札 (さつ、ふだ) の語義記述比較表

字 語	札	
	さつ	ふだ
日本国語大辞典	①ふだ。また、書状。手紙。 ②紙幣のこと。江戸時代は、兌換の対象によって、銀札、金札、銭札、米札などがあり、大名、旗本、寺社、公家、町村、あるいは信用ある個人などにより発行され、一定地域やその信用力の範囲内に流通した。明治以後、政府により太政官札、民部省札が発行され、明治一五年 (一八八二) からは日本銀行券が主体となった。	(「ふみいた (文板)」の変化した語) ①ある目的のために必要な事項を書き記した小さい木片・紙片・金属片など。ふみた。

	<p>②〈接尾〉文書、書状、手紙、証文、手形などを数えるのに用いる。 『字音語素』 漢 ①しるしの木ふだ。 ②かきつけ。てがみ。メモ。 ③入れふだ。 ④紙幣。さつ。 ⑤乗車船券。きつぷ。</p>	<p>②朝廷で、出仕した者の氏名を毎日確認し、その勤務日数を知るために用いた大型の木簡。 ③閻魔王庁に備えられているという帳簿で、死者生前の所業を記したものの。鬼録。 ④町中などに高く立てる板札。高札。また、制札。禁札。 ⑤神仏の守札。お札。おまもり。 ⑥質物と引き換えに質屋が交付する証券。質札。 ⑦入場券。木戸札。また、乗車券。 ⑧鑑札。手形。 ⑨商品の広告、開店、売り出しの知らせなどを書いて配ったり、張ったりするもの。ちらし。びら。引札（ひきふだ）。 ⑩花札やカルタやトランプなどの、絵や文字を書いた厚手の紙片。 ⑪巡礼が札所の柱や壁などに祈願のために貼る紙片。 ⑫江戸時代、岡場所で、芸娼妓の名を記して、娼家や検番に掲げておく名板。 ⑬「しまいふだ（仕舞札）」の略。 ⑭「いれふだ（入札）」の略。</p>
広辞苑	<p>①ふだ。 ②てがみ。 ③紙幣。</p>	<p>①ある目的のために必要な事項を書き記す小さい木片・紙片または金属片。 ②神仏の守り札。おふだ。 ③ある事を証明するもの。入場券・木戸札・手形・鑑札の類。 ④立て札。高札。 ⑤カルタ・花札・トランプなどの一枚一枚。 ⑥近世、岡場所で娼家や検番に掲げておく芸娼妓の名札。</p>
大辞泉	<p>①〈名〉紙幣。 ②〈接尾〉助数詞。書状・証文などを数えるのに用いる。</p>	<p>(ふみいた「文板」の音変化) ①目的とする内容などを簡単に書いて、人に示したり渡したりする紙片や木片。 ②神仏の守り札。 ③娯楽場などの入場券。また、乗車券、切符。 ④カルタ・トランプ・花札などの1枚1枚の紙片。 ⑤巡礼などが、祈願のために札所の柱・扉・壁などに貼る紙片。 ⑥「日給の簡」に同じ。</p>
大辞林	<p>①〈名〉紙幣。おさつ。 ②〈接尾〉助数詞。手紙・証文・手形などを数えるのに用いる。 漢 ①ふだ。木のふだ。 ②書きもの。てがみ。証憑となる文書。 ③紙幣。 ④乗り物の券。入場券。</p>	<p>〔「文板（ふみいた）」の転〕 ①文字・絵・記号などを記して、人に知らせたり目印としたりする木・紙・金属などの小片。 ②「御札（おふだ）」に同じ。 ③必要事項を書き記して、何らかの事実の証明とするもの。入場券・鑑札・質札・合い札・利札など。 ④多くの人に告げ知らせる事項を書いて掲げるもの。高札・立て札など。 ⑤カルタ・トランプ・花札などの一枚一枚。 ⑥〔「簡」と書く〕「日給の簡」に同じ。</p>
角川必携国語辞典	<p>①文字を書きつける、うすい木や紙のふだ。 ②乗車券。乗船券。 ③紙幣。 ④てがみ。文書。かきつけ。</p>	<p>①文字や符号や絵などを書いた小さな紙片や木片。 ②カルタ・トランプ・花札などのカード。 ③→「おふだ」</p>
新明解国語辞典	<p>紙幣。 →【造語成分】 ①文字を書いた、小さい木の板。 ②手紙や、証憑となる書きつけ。 ③乗車券・乗船券や入場券。 ④競売の時に価格を書くふだ。 →（本文）さつ【札】</p>	<p>文字や記号などが書きつけてある木片・紙片・金属片など。</p>

表 3-15. 市場（いちば、しじょう）の語義記述比較表

字語	市場	
	いちば	しじょう
日本国語大辞典	<p>①毎日または定期的に商人が集まって商品の売買、取引をする特定の場所。 ②食料品、日用品などの小売店が集まって、共同の設備の中で販売している常設の場所。マーケット。</p>	<p>①特定の物品や有価証券が定期的に取引され、その需要と供給の関係によって価格決定の働きをする場所。証券取引所、商品取引所、中央卸売市場など。いちば。 ②財貨やサービスのすべての需要と供給との間にある関係を総合的にとらえたことば。国内市場・国際市場、労働市場・金融市場、独占市場・完全競争市場など。 ①に対して特に抽象的市場をいう。マーケット。 ③ある商品が売られる範囲。</p>
広辞苑	<p>①毎日または定期的に商人が集まって、商品の売買を行う場所。市。 ②常設の設備があつて、おもに日用品・食料品を販売するところ。しじょう。マーケット。</p>	<p>①売手と買手が特定の商品を規則的に取引する場所。魚市場・卸売市場・証券取引所など。いちば。具体的市場。 ②広義には、一定の場所・時間に関係なく相互に競争する無数の需要・供給間に存在する交換関係をいう。国内市場・国際市場・労働市場など。抽象的市場。マーケット。 ③特定の商品やサービスの一定の購入者層。</p>
大辞泉	<p>①一定の商品を大量に卸売りする所。 ②小売店が集まって常設の設備の中で、食料品や日用品を売る所。マーケット。</p>	<p>①売り手と買い手が特定の商品や証券などを取引する場所。マーケット。 ②財貨・サービスが売買される場についての象徴的な概念。 ③商品の販路。マーケット。</p>
大辞林	<p>①毎日または一定の日に商人が集まって商品を売買する所。生産物を持ち寄って交換。売買する所。いち。 ②小さな店が集まって食料品・日用品などを常設的に売る所。マーケット。</p>	<p>(market) ①商品の売買が現実に行われる特定の場所。魚市場・中央卸売市場・証券取引所など。いちば。マーケット。</p>

		②商品としての財貨やサービスが交換され、売買される場についての抽象的な概念。国内市場・国際市場など。 ③商品売買の範囲。
角川を橋国語辞典	魚や野菜などを集め、商人が売り買いするところ。	品物の売買や取り引きがおこなわれるところ。
新明解国語辞典	①毎日(定期的に)生産物を持ち寄って業者が競売・競買する所。 ②各種の日用品・食料品の小売店が何軒か一か所に集まって消費者に売る所。常設市場。マーケット。→しじょう(市場)	①株式や特定の商品が定期的に取り引かれ、そこでの売買が一般取引価格を決定づける場所(一帯の地域)。 ②商品としての財貨・サービスの交換・売買を、需要・供給の相関関係から総合的にとらえた概念。 ③商品が売られる範囲。マーケット。 ④「いちば②」の改まった表現。

表 3-16. 主(しゅ、ぬし)の語義記述比較表

字	主	
語	しゅ	ぬし
日本国語大辞典	<p>①身分的な上下関係で上位にある者。自分が仕える人。主君。しゅう。</p> <p>②一国の統治者。きみ。君主。</p> <p>③集団の中心となる者。頭。つかさ。主宰。</p> <p>④一家の主人。また、武家社会で一族の惣領をもいう。あるじ。</p> <p>⑤所有者。持ち主。ぬし。</p> <p>⑥中心となること。また、そのもの。重要な点。おもな物事。眼目。中心。</p> <p>⑦行動をおこす者。働きかける方の者。主動者。</p> <p>⑧キリスト教において、父なる神またはキリストのこと。</p> <p>⑨(「じゅ」とも)謡曲をうたう時の音声の一つ。細く弱い女性的な声をいう。律の音が主の声にあたる。</p> <p>【字音語素】 漢</p> <p>①ぬし。あるじ。きみ。団体の中心となるもの。</p> <p>②行為するもの。はたらきかける側。ごちそうやふるまいをする人。</p> <p>③中心となる。おもな。</p> <p>④つかさどる。中心となって働く。</p> <p>⑤まもる。根本におく。</p>	<p>I <名></p> <p>①ある物事を主宰し、支配し、所有するなどして、その代表、あるいは中心となる人。</p> <p>①国や家など、ある社会、地域、集団などを治める首長。また、一般にある事柄を中心になってつかさどる人。君主。主人。あるじ。</p> <p>②主従関係における、主人、主君。しゅう。あるじ。また、従者から主を尊んでいう。</p> <p>③男女関係における夫や情夫。また、女から自分の男を尊び親しんでいう。</p> <p>④所有者。持ちぬし。「家主」「地主」などと複合しても用いる。</p> <p>⑤動作、または動作の結果生じた物事の主体。また、事の当人。本人。「歌主」「拾い主」などと複合しても用いる。</p> <p>⑥山、川、池、家屋などにすみつつき、劫(こう)を経た、なみはずれて大きい動物。その動物が霊力を持ち、その場所を支配していると考えられる。また転じて、同じところに長年居住、勤務、または出入りしている人をたとえていう。</p> <p>⑦貴人を尊び親しんでいう語。殿(との)。君(きみ)。「…のぬし」の形で、人名などに添えて敬称としても用いる。</p> <p>II <代名></p> <p>①自称。わたし。</p> <p>②対称。</p> <p>①敬意をもって、相手をさす語。多く男に対して用いるが、時には女に対しても用いる。あなた。貴殿。お前さん。尊敬の度はさほど高くなく、同輩以下のものに対して用いることが多い。中世末期以後、尊敬の度は一段と低くなる。</p> <p>②女から、夫、恋人など特定の男をさして親愛の意をこめていう語。また、近世、遊里のことばとして、遊女から客をさしていう。</p> <p>III <接尾> 男の呼称のあとに付けて敬意を表わす語。まれに、女に対しても用いる。尊敬の度はさほど高くない。</p>
広辞苑	<p>①人や物を所有、または領有・支配する者。あるじ。ぬし。</p> <p>②おもなこと。肝要なこと。</p> <p>③はたらきかける側のもの。行為をするもの。</p> <p>④(Kyrios・Dominus)キリスト教でかみまたはイエス=キリストの称。</p>	<p>曰【名】</p> <p>①土地や家などを領有し、支配する人。また一般に、ある事を主宰する人。首長。君主。</p> <p>②主人の尊称。(後世は尊敬の意を失う)</p> <p>③人・相手の尊称。</p> <p>④所有者。持ち主。</p> <p>⑤ある行為をした人。ある事柄の中心となる人。本人。当人。</p> <p>⑥おっと。良人。</p> <p>⑦山または河などに古くからすみ、霊力があると信じられている動物。転じて、ある場所に長く住みついている人。</p> <p>曰【代】あなた。また、女からの親密な男を呼ぶ語。</p>
大辞泉	<p>①自分が仕える人。主人。</p> <p>②国家や家、また集団などのかしらとなる人。</p> <p>③中心となること。また、そのもの。</p> <p>④キリスト教で、神、またはキリスト。</p>	<p>①<名></p> <p>①その社会・集団などを支配・統率する人。あるじ。</p> <p>②所有者。持ち主。</p> <p>③動作・行為の主体。また、ある事柄の主人公。</p> <p>④山や川などに古くからすみ、霊力があると信じられている動物。転じて、ある場所に長く住んでいる人。</p> <p>⑤夫。また、定まった情夫。</p> <p>②<代>二人称の代名詞。</p> <p>①敬意や親しみを込めて相手を呼ぶ語。多く同輩以下の男性に対して用いる。</p> <p>②女性が親密な男性を呼ぶ語。</p> <p>③<接尾>人名や呼称に付けて、軽い敬意を表す。男性に用いることが多いが、まれに女性にも用いる。</p>
大辞林	<p>①自分が仕え従う人。あるじ。主人。しゅう。</p> <p>②国家・団体・家などのかしら。</p> <p>③中心となること。また、その物事。おも。</p> <p>④キリスト教で、神またはキリストをいう。</p>	<p>①<名></p> <p>①一家の主人。あるじ。</p> <p>②所有者。</p> <p>③動作、または動作の結果生じた事柄の主体。また、その当人。</p>

		<p>④山・沼・森などに古くから住み、あたりを支配していると考えられている大きな動物。また、一つの職場・場所などに古くからいる人をたとえていう。</p> <p>⑤亭主。おっと。</p> <p>⑥ある土地や集団・社会などを支配し、つかさどる人。</p> <p>⑦自分の仕える人。主人。</p> <p>⑧「…のぬし」の形で) 人名などの下に付けて、敬称として用いる。</p> <p>②〈代〉</p> <p>①二人称。</p> <p>⑦敬意をもって相手をさす。もつとも、尊敬の度はさほど高くなく、同輩以下の者に対して用いることが多い。あなた。</p> <p>④近世、女性から夫・恋人など特定の男性を親愛の意をこめていう。また、遊女が客に対していうのにも用いる。あなた。</p> <p>②三人称。近世、遊女が客のことを親愛の意をこめていうのに用いる。あの方。</p>
角川英辞林	<p>①中心となるもの。おもなもの。</p> <p>②中心となる人、あるじ。</p> <p>③キリスト教の神ヤハウエと、その子キリスト。</p> <p>④他にはたらきかける側。</p>	<p>①①〈名〉主人。あるじ。また、主人公。</p> <p>②もちぬし。オーナー。</p> <p>③そこに長くいる人や動物。</p> <p>②〈代名〉昔、男性に敬意をこめて呼びかけたことば。あなた。</p>
新明解国語辞典	<p>①団体の長。かしら。</p> <p>②(キリスト教で) 天主・神と呼ばれるヤハウエ、またはその子と言われるイエス。</p> <p>③重点のおかれる事柄・中心。</p> <p>→【造語成分】しゅ・す</p> <p>①何かを管理し、音頭を取って行う(人)。</p> <p>②行為を積極的にする方の側。</p> <p>③客を受け入れる側。あるじ。</p> <p>④中心となる。おもな。→(本文)しゅ【主】</p>	<p>①①主人。</p> <p>②持主。</p> <p>③(古)夫。</p> <p>④(森・沼・職場など)そこに古くから居て、仲間うちから一目おかれているような存在。</p> <p>⑤それをする(した)人。</p> <p>②(代)①(各地の方言)敬愛の意を込めた二人称。</p> <p>②昔、女性が男性を親しんで呼んだ言葉。</p>

表 3-17. 種(しゅ、たね)の語義記述比較表

字 語	種	
	しゅ	たね
日本国語大辞典	<p>①植物のたね。種子。</p> <p>②種類。品種。たぐい。名詞に付いて接尾語的に用い、その名詞に含まれる種類の一つであることを表したり、いくつかの種類を数える単位としても用いる。</p> <p>③生まれ。血筋。</p> <p>④物事の根源。もと。また、物事の素材や人の素質など、そのものを成立させている重要な要素。</p> <p>⑤哲学で、より広い集合(類)の中に含まれ、種差によって他と識別される、より狭い集合。</p> <p>⑥生物群の分類学上の基本単位。属の下位で、他の個体または個体群からある特徴的な形態上の不連続性を示す個体群をいう。通常、一定の生息域、分布域をもち、個体間で生殖により、正常な子孫を生むことができる。種の下位の分類階級として、亜種・変種・品種などがある。生物学的種。リンネ種。</p> <p>⑦仏語。仏菩薩が衆生の心に植えつける種子で、仏法との縁が結ばれることをいう。下種。</p> <p>⑧修行を三つの段階に分け、その初歩段階。</p> <p>⑨世阿彌の作劇法理論の一つ。「種・作・書」の三段階の第一で、素材の選択をいう。</p> <p>『字音語素』</p> <p>呉</p> <p>①植物のたね。生殖のもと。</p> <p>②穀物や草木のたねをまく。うえる。</p> <p>③同じたねから出たもの。他とちがった共通性をもつなから。しゅるい。</p> <p>④生物分類上の基礎単位、属の下位。</p>	<p>①草木の発芽のもとになるもの。種子(しゅし)。</p> <p>②果実の核。さね。</p> <p>③動物の発生するもととなるもの。精子など、生殖のもとになるもの。</p> <p>④(胤)血統。血すじ。また、それを伝えるものとしての子。子孫。系統。</p> <p>⑤物事の発生するもと。根源。原因。</p> <p>⑥物をつくる材料。制作の原料。また、料理の材料。汁の実。</p> <p>⑦手段を施す材料。後に備えてあらかじめつくり設けておくもの。仕掛け。また、裏に隠された事実やからくり。</p> <p>⑧物事のよりどころとするもの。準拠する基(もと)となるもの。たより。</p> <p>⑨元金。元手。</p> <p>⑩質草。</p>
広辞苑	<p>①同じなから。分類した一つ。</p> <p>②(species)生物分類上の基本的単位。形態・生態などの諸特徴の共通性や分布域、相互に生殖が可能であることや遺伝子組成などによって、他種と区別しうるもの。さらに亜種・変種・品種に分けることもある。生物種。化石についてはさらに時間の経過に伴う変化(すなわち進化)を加味して定義し、進化学的種といる。</p> <p>③種概念の略。</p>	<p>①植物の発芽するもととなるもの。特に、種子植物の種子。</p> <p>②動物の発生するもと。</p> <p>③(胤)とも書く)血すじ。また、伝統を伝えるものとしての子。</p> <p>④物事の発生する、または成り立つもと。原因。</p> <p>⑤物事を生み出すための材料。</p> <p>⑥特に、料理の材料。汁の実。</p> <p>⑦物事を行うてがかり。よりどころ。根拠。</p>
大辞泉	<p>①一定の基準によって分類・類別したもの。種類。たぐい。</p> <p>②生物分類学上の基本単位。属の下位。共通する形態的特徴をもち、他の個体群との形態の不連続性、交配および生殖質の合体の不能、地理的分布の相違などによって区別できる個体群。種を細分するときは亜種・変種・品種を用いる。</p> <p>③「種概念」の略。</p>	<p>①植物が発芽するもとになるもの。種子。</p> <p>②人または動物の系統を伝えるもととなるもの。精子。</p> <p>④(胤)とも書く)血筋。血統。父親の血筋をさすことが多い。また、それを伝えるものとしての、子。</p> <p>③物事の起こる原因となるもの。</p> <p>④話や小説などの題材。</p> <p>⑤料理の材料。また、汁の実。</p> <p>⑥裏に隠された仕掛け。</p>

		⑦よりどころとするもの。 ⑧物の、質。
大辞林	①植物のたね。種子。 ②種類。たぐい。 ③ (species) ⑦生物分類上の基本単位。属の下位で、形態的に他と不連続な特徴をもち、原則として、相互に正常な有性生殖を行い得る個体群をいう、種はさらに主として形態的特徴から、亜種・変種・品種などに分ける。 ④『論』「種概念」に同じ。	①⑦ (植物で) 発芽のもととなるもの。種子。 ④動物の誕生のもととなるもの。 ②(「胤」とも書く) 血統また、血統を受け継ぎ伝えていくもの。子。子孫。 ③ある事の原因となる物事。 ④手品・奇術などの仕掛け。 ⑤材料となるもの。 ⑦料理に用いる材料。 ④話・物語・記事などの材料。 ⑦もととなるもの。よりどころ。 ⑤元金。もとで。 ⑥性質。階級。
角川必携国語辞典	①植物のたね。また、ものごとが起こるもと。 ②生物の分類上で、属の下位の単位。また、ある共通の傾向や性質をもつもの。	①植物の発芽するもととなるもの。 ②ちすじ。こども。 ③ものごとの発生する原因。 ④材料。 ⑤手品などの仕掛け。
新明解国語辞典	①種類。 ②生物分類上の基本単位。属の下位区分で、共通の形態的特徴を持ち生殖作用を営むことが可能な個体群。 ③ (哲学・倫理学で) 「類」の下位の分類。→種概念 →【造語成分】 ①たね。 ② (生物の分類で) 最下の単位。互いに類似する個体の一群の名。 ③系統が同じもの。→属→ (本文) しゅ【種】	①生長すれば親の植物と同じ単体になる、小さな粒。 ②父方の血筋。 ③喜怒哀楽・心配・苦・不和などを起こす基になる、ちょっとした事。 ④話したり書いたり考えたりするための材料や手品・奇術などを成立させるための仕掛け。 ⑤料理などの材料 (として汁物に入れるもの)。また、すし屋で、すし飯の上に乗せる魚や貝の称。

表 3-18. 獣 (けもの、けだもの) の語義記述比較表

字 語	獣	
	けもの	けだもの
日本国語大辞典	(毛物の意) ①「けだもの (獣) ①」に同じ。 ②「けだもの (獣) ②」に同じ。	①全身に毛が生えた、四足をもつ哺乳動物。けもの。獣 (じゅう) 類。 ②特に、家畜をいう。 ③ (人間のもっている信義、情け、理性などが無い生き物の意) 人間的な味のない人をのしり、あざけっていう。また、遊女や高利貸などを卑しめたり、一般的に他人をあざけり卑しめていう場合にも用いられる。人でなし。 ④盗人・詐欺師仲間の隠語。 ④毛布をいう。 ⑤金庫をいう。 ⑥詐欺賭博者などが、その被害者をいう。 ⑦人におだてられて金銭をむだ使いする者。
広辞苑	(毛物の意) 全身に毛のある四足の動物。畜類。けだもの。	(「毛の物」の意) ①全身に毛があり、四足である動物。けもの。 ②不人情な人やろくでもない人間をのしっていう語。人でなし。
大辞泉	(毛物の意) 獣類。けだもの。	(毛の物の意) ①全身に毛が生え、4足で歩く哺乳動物。けもの。 ②人間としての情味のない人をのしり卑しんでいう語。
大辞林	(毛物の意) けだもの。	(毛の物の意) ①全身毛におおわれ、四肢で歩く哺乳動物。特に、野生のもの。けもの。 ②人間らしい心のない人をのしっていう語。人でなし。
角川必携国語辞典	全身毛におおわれた、四つ足の動物。けだもの。 「毛物」の意味。	けもの。また、不人情な人や残酷な人をのしってということば。
新明解国語辞典	(毛物の意) (人間を除く) 哺乳動物の通称。	全身毛でおおわれ、四足で歩く哺乳動物。 (「けだもの同様に本能のままに行動する人間」の意で、欲望むき出しの人や義理・人情をわきまえない人をのしっても言う)

表 3-19. 宿 (やど、しゅく) の語義記述比較表

字 語	宿	
	やど	しゅく
日本国語大辞典	宿・屋戸・屋外 (「屋の処 (と)」の意か。一説に「屋の戸」「屋の外 (と)」の意とする) ①家の戸。家の入口。戸口。 ②家の戸口のあたり。家のまわりの庭。庭さき。 ③家。すみか。家屋。	① <名> ①やどや。はたごや。泊まりやど。旅館。旅宿。 ②宿場。うまや。つぎば。 ③中世、主として東国地方などの町場をさす語。 ④近世、江戸品川宿の略。特にその花街をさす。

	<p>④（「やどり」との混同から）一時的に泊まる家。<u>旅先で泊まる</u>ところ。<u>旅宿</u>。転じて、<u>宿屋</u>。<u>旅館</u>。また、<u>宿泊</u>すること。</p> <p>⑤特に、自分の家。我が家。自宅。うち。</p> <p>⑥家の主人。亭主。特に、妻が自分の夫のもとを他人に対していう時に用いる。</p> <p>⑦奉公人の親もと、または請人（うけにん）。</p> <p>⑧実家。さと。</p> <p>⑨ある目的をもって人が寄り集まり、出入りする家屋。また、賭博、逢引き、売春などある種の行為が営まれるのに提供される家。中宿、小宿などの類。</p> <p>⑩揚屋。また、置屋。</p> <p>⑪車屋が雇って抱えておく車引き。ひきこ。</p>	<p>⑤星の座。星宿。星座。</p> <p>②<接尾>旅の宿りをかぞえるのに用いる。泊まり。泊（はく）。</p> <p>『字音語素』 漢</p> <p>①旅人の泊まる<u>ところ</u>。<u>やどや</u>。はたご。</p> <p>②星座。</p> <p>③やどる。<u>泊まる</u>。</p> <p>④前夜からの。もとのからの。早くからの。</p> <p>⑤経験を積んでいる。</p>
広辞苑	<p>①（「屋戸」と書く）家を閉ざす戸。家の戸口。</p> <p>②（「屋前」「屋外」と書く）家の戸口のあたり。庭先。</p> <p>③いえ。すみか。</p> <p>④（屋取る意の「宿り」と混同されるようになる）</p> <p>⑦一時泊まる所。<u>旅先で泊まる</u>こと。また、その家。はたごや。宿屋。</p> <p>①農村・漁村などで、青年男女が集まって仕事をしたり寝泊りしたりする家。若衆宿・娘宿の類。</p> <p>⑤主人。あるじ。</p> <p>⑦他人に対して、妻が夫のことを指して言う語。</p> <p>①主家に対して、奉公人が親元または請人の家をいう語。</p> <p>⑥揚屋。また、その主人。</p>	<p>①やどること。</p> <p>②旅人のとまる<u>所</u>。<u>やど</u>。また、宿屋の集まっているところ。宿駅。</p> <p>③星座。</p> <p>④→しゆく「夙」</p>
大辞泉	<p>（「屋の処」の意か。または「屋の戸」「屋の外」の意か。）</p> <p>①家。すみか。</p> <p>②（「やどり」との混同から）旅先で一時的に泊まる家。また、<u>宿屋</u>。</p> <p>③妻が他人に対して夫のことをいう語。主人。宅。</p> <p>④奉公人の親元や請け人。また、その家。</p> <p>⑤ある目的のもとに、人々が集まる所。若者宿・娘宿など。</p> <p>⑥揚屋。置屋。また、その主人。</p> <p>⑦家の入り口。戸口。</p> <p>⑧家の庭先。</p>	<p>①〈名〉</p> <p>①泊まること。また、その場所。<u>やどや</u>。<u>旅館</u>。</p> <p>②宿場。宿駅。</p> <p>③星座。星宿。</p> <p>②<接尾>助数詞。旅の宿りを数えるのに用いる。</p>
大辞林	<p>①住む家。すみか。また、自分の家。</p> <p>②旅先で泊まる所。<u>宿屋</u>。</p> <p>③家の主人。特に、妻が他人に対して、夫をさしていう語。</p> <p>④奉公人の親もと、または、その請人（うけにん）の所。</p> <p>⑤揚屋。置屋。また、その主人。</p> <p>⑥屋敷の庭。庭さき。</p>	<p>①〈名〉</p> <p>①泊まる所。<u>やどや</u>。はたごや。</p> <p>②宿場。宿駅。</p> <p>③星座。星宿。</p> <p>②〈助数詞〉旅の泊まりを数えるのに用いる。泊。</p>
角川必携国語辞典	<p>①旅さきでとまる<u>ところ</u>。<u>宿屋</u>。<u>旅館</u>。</p> <p>②住む家。住所。</p>	<p>①自分の家でないところに、かりにとまる。また、<u>とまる</u>ところ。</p> <p>②前々からの。あらかじめの。</p> <p>③星座。</p>
新明解国語辞典	<p>①△その人の住む（住んでいる）家。</p> <p>②奉公人にとって自分の家である親許オヤモト、または請人ウケニン。</p> <p>③その家の主人である、自分の夫。</p> <p>②旅先で<u>泊まる</u>所。</p>	<p>宿場。</p> <p>→【造語成分】</p> <p>①<u>とまる</u>所。<u>やどや</u>。</p> <p>②とまる。<u>やどる</u>。</p> <p>③前からの。</p> <p>④年をとって、経験がある。→（本文）しゆく【宿】</p>

表 3-20. 身（しん、み）の語義記述比較表

字 語	身	
	しん	み
日本国語大辞典	<p>からだ。身体。み。</p> <p>『字音語素』</p> <p>①み。からだ。</p> <p>②自分。人としての、み。本体。</p> <p>③物のなかみ。</p> <p>④「身毒」は、音訳字。天竺。「インド」の古称。</p>	<p>（「み（実）」と同語源）</p> <p>①<名></p> <p>①人間、または他の動物のからだ。身体。肉体。</p> <p>②骨、皮に対して、人間や鳥、獣、魚、貝などの肉をいう。しし。ししむら。</p> <p>③その人のからだの意から転じて、その人自身。特に他人に対して、おのれ自身をいう。</p> <p>④その人自身の有様、または位置。その人の立場。身の上。身のさま。</p> <p>⑤その人自身が世に占める地位。その人自身の分限、程度。身分。分際。身のほど。</p> <p>⑥命あるからだ。生命。</p> <p>⑦からだのこなし。身ぶり。恰好（かっこう）。また、声色などと同様に、見せ物としての身振りをもいう。</p> <p>⑧自分が何かやろうとする心。誠心。</p> <p>⑨その人に関係のある者。その人の縁者。身内。また、自分の側に属する人。味方。また、博徒、やくざの用語で、一家の者。</p> <p>⑩衣服の袖（そで）、襟（えり）、衿（おくみ）を除き、胴体を覆う部分。身丈、身幅の大小により、本身、四つ身、三つ身、一つ身などという。身頃（みごろ）。</p> <p>⑪容器。外殻、外観などに対してなかみをなすもの。内容。実質。</p> <p>⑫刀剣の鞘（さや）の中におさまっている部分。刀身。「抜き身」</p>

		<p>⑬容器の蓋（ふた）に対して、物をいれる側。また、昔の鏡などのように蓋つきの器物で、蓋に対して本体の方。</p> <p>⑭木材で、樹皮の内側にある材の部分。「赤身」「白身」</p> <p>⑮（財布のなかみの意か）金銭をいう、盗人仲間の隠語。</p> <p>② <代名></p> <p>①自称。中世、近世において、男子がやや優越感をもって、自分をさしている語。</p> <p>②対称。接頭語「お」「おん」を伴って、相手をさしている語。</p>
広辞苑	<p>肉体。からだ。み。</p>	<p>①からだ。身体。</p> <p>②自身。自分。</p> <p>③（代名詞的に）自分。私自身。</p> <p>④身分。分際。地位。</p> <p>⑤その人の立場。</p> <p>⑥その人の生き方。</p> <p>⑦人の全力。まごころ。</p> <p>⑧（皮・骨に対して）肉。ししむら。</p> <p>⑨竹・木の皮の内部。</p> <p>⑩鞘の中の刃</p> <p>⑪蓋のある器物の、物を入れる方。</p>
大辞泉	<p>【漢字項目】</p> <p>①人のからだ。</p> <p>②自分。わがみ。</p> <p>③社会的な地位や立場。みぶん。</p> <p>④なかみ。物の本体。</p>	<p>（「実」と同語源）</p> <p>① <名></p> <p>①生きている人間のからだ。身体。</p> <p>②わが身。自分自身。</p> <p>③自分が何かをやろうとする心。誠心。</p> <p>④地位。身分。立場。</p> <p>⑤皮や骨に対し、食べられる部分。肉。</p> <p>⑥容器の、ふたに対して物を入れる部分。また、ふた付きの鏡などで、ふたに対して、本体のほう。</p> <p>⑦衣服の袖・襟・衿などを除き、胴体を覆う部分。身頃。</p> <p>⑧刀の、鞘に納まっている刃の部分。刀身。</p> <p>⑨木の、皮に包まれた部分。</p> <p>⑩身ぶり。</p> <p>② <代></p> <p>①一人称の人代名詞。わたし。それがし。中世・近世で用いられた上品でやや尊大な言い方。</p> <p>②二人称の人代名詞。「お」「おん」に続けて用いられる。</p>
大辞林	<p>漢 呉</p> <p>①み。からだ。</p> <p>②われ。自分。</p> <p>③みのうえ。</p> <p>④なかみ。</p>	<p>I <名>（「み（実）」と同源）</p> <p>①生きている人のからだ、またその主体としての自分。</p> <p>①身体。からだ。</p> <p>②我が身。自分自身。</p> <p>②社会的存在としての自分のありようをいう語。</p> <p>①地位。身分。分際。</p> <p>②立場。</p> <p>③身持ち。</p> <p>③あるものの本体部分。付属部分や表面部分に対していう。</p> <p>①（皮・骨に対して）肉。</p> <p>②ふたのある器物で物を入れる本体の部分。</p> <p>③（鞘や柄に対して）刀や鋸の、刃を持つ金属部分。</p> <p>④木の皮の下、材の部分。</p> <p>⑤衣服の袖・襟などを除いた、胴体をおおう部分。</p> <p>II <代></p> <p>①一人称。男子がやや優越感をもって自分をさしている。中世・近世の語。</p> <p>②（接頭語「お」「おん」を冠して）「おみ」「おんみ」の形で二人称。相手をさしている。</p>
角川必携国語辞典	<p>①人間のからだ。</p> <p>②みのうえ。自分。</p> <p>③ものなかみ。本体。</p>	<p>①人間や動物の肉体。</p> <p>②自分自身。</p> <p>③立場。身分。</p> <p>④刀の刀身。</p> <p>⑤ふたのある容器で、物を入れるほう。</p>
新明解国語辞典	<p>→【字音語の造語成分】</p> <p>①からだ。</p> <p>②社会的環境の中に置かれた自分。</p> <p>③刀の中身。</p>	<p>①①（個々の）生きている人のからだ。</p> <p>②社会の一員として何らかの役割や責任を負って生きている個々の人（置かれた立場や境遇）。</p> <p>③A（動物の内側をおおう皮・殻や体を形成する骨組みに対して）内部を満たす肉（実質）。</p> <p>B（ふたに対して）容器の、中に物を取めるほうの部分。</p> <p>C（鞘に対して）その中に納まる刀身。</p>

表 3-21. 生花 (いけばな、せい) の語義記述比較表

字 語	生花	
	いけばな	せい
日本国語大辞典	(「いけ」は、生かしておく意の「いける」の連用形から) 木の枝や草花などを切り取り、枝葉の形をととのえて、花器にさすこと。また、さしたものを、その技術、方式。華道(かどう)。	①いけばな。挿花。 ②(造花に対して)ほんとうの花。自然の花。 ③手品(てじな)のことをいう。
広辞苑	①草木の枝・葉・花などを切り取って、水を入れた花器に挿し、席上の飾りとする。また、挿したものを。挿花。 ②→せい①	①江戸中期に成立したいけ花の様式。天地人を象徴する三本の役枝を用いて花姿をととのえるのが特徴。流儀花。格花。 ②(造花に対して)自然の生きた花→いけばな
大辞泉	草木の枝・葉・花を切り取り、花器に挿し、形を整えて鑑賞に供すること。また、挿したものを。立花・生花・自由花など、種々な様式がある。華道。挿花。	①江戸中期に興った生け花の様式。天・地・人の三格の役枝で基本的に構成し、全体を不等辺三角形にまとめ、水際を1本とする。池坊では「しょうか」という。 ②自然の花。造花に対していう。
大辞林	①草木の枝・茎・花・葉などを素材に花器と組み合わせ、形をととのえて観賞用の作品を作る日本固有の伝統芸術。立花たてばな・立華りつか・生花・挿入花なげいけばな・盛花・投入・自由花などの形式がある。 ②室町時代、手桶などに生かしていた花材を室内の飾りに用いたもの。 ③植物の出生を理論化し、表現法を形式化して役枝を定めた花。格花。	①いけばな。 ②自然の生きた花。
角川必携国語辞典	草木の枝・葉・花をととのえ花器にさすこと。また、その技術。華道。	①人工ではなく、自然の生きている花。 ②いけばな。
新明解国語辞典	(鑑賞のために)草・木の枝・葉や花を形や色のバランスを考えて、花器にさすこと(技術)。	①(造花と違って)自然のままの、生きた花。「なまばな」とも。 ②華道の形式の一つ。形を重んじ、決まった型に生ける。生け花。

表 3-22. 性 (さが、せい、しょう) の語義記述比較表

字 語	性		
	さが	せい	しょう
日本国語大辞典	①生まれつきの性質。もちまえ。 ②もって生まれた運命。宿命。 ③ならわし。習慣。くせ。和歌では地名の嵯峨を掛けていることがある。 ④良いところと悪いところ。人間の善悪。また、特に欠点・短所・悪癖。	①うまれつき。もちまえ。天から与えられた本質。たち。さが。天性。 ②こころ。心の作用。心の本体。理性。 ③(英 sex の訳語)男女、雌雄を比べた場合のそれぞれの特徴、本質。セックス。 ④性別。 ⑤その対立から起こる本能の働き。また、その行為。性欲。性交。 ⑥(英 gender の訳)インド・ヨーロッパ語やセム語に見られる、名詞・代名詞・形容詞等の文法範疇の一つ。冠詞などと呼応関係から男。女性、また、男・女・中性などに分ける。 ⑦(名詞の下に付いて)そのような性質、状態、程度であることを表す語。 ⑧「せい(精)⑦」に同じ。 『字音語素』 漢 ①生まれつき。さが。せいしつ。 ②物の性質。たち。 ③男女、雌雄の別。生殖本能のはたらき。 ④インド・ヨーロッパ語で名詞、代名詞などにみられる文法上の区別。	①生まれつきの性質。本性。 ②表面を覆われてわからなくなっているが、本来の性質や考え。もともとのもの。また、正体。 ③物の性質。もちまえ。また、ありのままの性状。 ④習性。ならい。 ⑤たましい。こんじょう。精神。性根。 ⑥物の中核になるもの。根本になるもの。 ⑦仏語。本来そなえている性質としての本性・自性など、外からの影響によって変わらない本質。 『字音語素』 呉 ①生まれつき。本来具している性質。 ②男女いずれかの本質をもつもの。
広辞苑	(字音語か。すがた・さまの意) ①もって生まれた性質や宿命。 ②ならわし。習慣。くせ。	①うまれつき。さが。 ②(多く接尾辞的に)物事たち・傾向。 ③(sex) 男女、雌雄の区別。 ④〔言〕(gender) 名詞を分類する文法範疇の一つ。ラテン語・ドイツ語・ロシア語などでは男性・中性・女性に分ける。ロマンス諸語では多く男性・女性に分け、英語では性の区別がない(人称代名詞にはある)。 ⑤〔社〕ジェンダーに同じ。→しょう(性)	(呉音) ①先天的な性質。うまれつき。性状。たち。 ②〔仏〕外的影響・関係の如何によらず、常に同一である本質。 ③陰陽道で木・火・土・金・水の五行を人の生年月日などに配当し、その相生・相剋の理によって禍福・吉凶を定めるもの。→せい(性)
大辞泉	①生まれつきの性質。性格。また、持って生まれた運命。宿命。 ②いつもそうであること。ならわし。習慣。 ③よいところと悪いところ。特に、欠点や短所。	①(名) ①人が本来そなえている性質。うまれつき。たち。 ②同種の生物の、生殖に関して分化した特徴。雄性と雌性。雄と雌、男と女の区別。また、その区別があることによって引き起こされる本能の動き。セックス。 ③(gender) インド・ヨーロッパ語・セム語などにみられる、名詞・代名詞・形容詞・冠詞などの語形変化によって表される文法範疇の一。男性・女性・中性などの区別がある。日本語には、文法範疇としての性の区別はない。英語でも代名詞にみられるだけで、それ以外の品詞では消滅している。	①生まれつきの性質。持って生まれた性分。 ②そのものもともとのたち。本来の性質・品質。 ③根性。たましい。性根。 ④陰陽道で、木・火・土・金・水の五行を人の生まれた年月日に配した。これによって吉凶を占う。 ⑤仏語。あらゆるものが生来備えていて、外からの影響によって変わることはない本質。本性。自性。 ⑥習性。ならい。

		②〈接尾〉名詞の下に付いて、物事の性質・傾向を表す。	
大辞林	①生まれつきの性質。もって生まれた性分。持ち前。 ②ならわし。ならい。習慣。	①生まれつきもっている性質。生まれつき。さが。 ②男と女、またはめすとおすの区別。 ③男女両性間、あるいは同性間において生じる肉体的結合への欲求や衝動。また、それに基づく諸活動。 ④ (gender) インド・ヨーロッパ語において、名詞・代名詞・形容詞などにみられる、男性・中性・女性などの文法上の区別。 ⑤名詞の下に付いて、その性質・傾向をもっていることを表す。 漢 セイ漢 ショウ呉 ①生まれつき。さが ②物事の性質。傾向。たち。 ③雌雄の間の区別。 ④生殖本能の働き。	(呉音) ①もって生まれたもの。生まれつきの気質・傾向・素質など。 ②物の品質・材質。人の体質。 ③魂。精神。根性。 ④習性。ならい。 ⑤【仏】 ⑦外部の影響や周囲との関係で変化することのない、その物自体のもっている性質。その物自体を特徴付けている不変の性質。 ⑧衆生の奥に秘められている真如。 ⑨衆生の本来の姿。また、それが仏性であること。 漢 →せい (性) 漢
角川必携国語辞典	生まれつきの性質。また、習わし。	①生まれつきのたち。さが。 ②ものごとの傾向。 ③男女や雌雄の別。	①〈名〉①生まれつきの性質。たち。また、本来の品質。 ②根性。 ②〈造語〉【「～性」の形で】…の性質。
新明解国語辞典	(本来、漢語とされる) 自分の力ではどうすることも出来ない、 <u>生まれつきの性質</u> やめぐりあわせ。	①生まれつき (の性質)。 ②からだの特質から来る、男女・雌雄の区別。 ③成熟した男女が持つ、相手との肉体的な結合を欲求としていただく本能。 ④性行為。性交。セックス。 ⑤ (インドヨーロッパ語族などで) 「性②」に対応した、語尾変化のしかたや、代名詞・冠詞の使い方など。 →【造語成分】 ①物事の性質・傾向。 ②…の状態。…の程度。…さ。 → (本文) せい【性】	①ある傾向・特徴を持った性質。 ②五行を人の生年月日に配当したもの。 →【造語成分】しょう・せい <u>男女の別</u> 。→ (本文) しょう【性】

表 3-23. 値 (あたい、ね) の語義記述比較表

字 語	値	
	あたい	ね
日本国語大辞典	(相当する意の動詞「あたう (能)」の名詞系か。一説に「あた (当) あひ (合)」の変化した語という) ①そのもののねうちに匹敵し、相当するもの。 ②ねだん。代金。また、ねだんに相当する金銭。 ③労力に相当する報酬。その金銭または品物。 ④ねうち。価値。 ⑤ (表記はもっぱら「値」) 数学で、文字や関数の表す具体的な数をさす。	①売買の相場。あたい。ねだん。価格。 ②物のねうち。物のよさ、有用さなどの度合。
広辞苑	(アタ (当) アヒ (合) の約。ぴったり一対一で合う意) ①売買などの対象物に相当する金額。 ⑦代価。代金。値段。 ④ある事・労力の相当物として与える金銭・金高。 ②ものの価値。ねうち。 ③《値》〔数〕数で表したもの。数値・関数値・測定値など。 ④論理学や情報科学で、変数が定められた集合の一要素を指す時の、その要素。 ◇「価」は商品に付けた値段や金額、「値」は物事のねうちや数量の場合に使うことが多い。	売買の相場。あたい。ねだん。
大辞泉	①価格。値段。また、代価。 ②物の値打ち。価値。 ③ (値) 数学で、文字や式・関数などがとる数値。	①物が売買されるときに金額。値段。あたい。価値。 ②物の値うち。価値。
大辞林	(動詞「能う」の連用形か) ①売買の際のねだん。商品のねだん。 ②価値。ねうち。 ③数学で、文字や関数などがとる具体的な数。 ④物のねうちに匹敵するもの。 【表記】あたい (価・値) 「価」は特に「ねだんや価格」の意。 「値」は物事の価値について広く用いる。	①物の売り買いに際しての金額。値段。あたい。価格。 ②ものの価値。ねうち。
角川必携国語辞典	①【価】商品の値段。代金。 ②【値】①ねうち。価値。 ②〈名〉数学で、文字や数式があらわす数。また、計算して出した数。数値。	売買するときの金額。ねだん。ねうち。

新明解国語辞典	①「ねだん・ねうち」の意のやや改まった表現。「価」とも書く ②(数学で)文字や式などが表わす数。 ③数値。	値段。(「値段」に比べて、造語性が強い)
---------	---	----------------------

表3-24. 怒る(いかる、おこる)の語義記述比較表

字	怒る	
	いかる	おこる
日本国語大辞典	①自分の意に反するものの存在にとって感情がいらだち荒れる。おこる。いきどおる。立腹する。 ②荒々しくふるまっておどす。にらみつける。 ③物の形状が角立つ。ごつごつする。そびえる。 ④勢いはげしく動く。ただけしくふるまう。	①いかる。腹を立てる。興奮して気が荒くなる。 ②しかる。
広辞苑	【自五】①不愉快・不満を感じて気持ちがあらだつ。また、その気持ちを表に出す。腹を立てる。おこる。 ②力んだ荒々しい形状があらわれる。かどばる。かど立つ。 ③はげしく勢いづく。荒れくるう。 ④水面がもりあがり、水があふれる。	【自五】①不愉快・不満を感じて気持ちがあらだつ。また、その気持ちを表に出す。腹を立てる。いかる。 ②叱る。
大辞泉	①腹を立てる。おこる。憤慨する。 ②激しく動く。荒れ狂う。 ③角張って、ごつごつしている。角立つ。	①不満・不快なことがあって、がまんできない気持ちを表す。腹を立てる。いかる。 ②よくない言動を強くとがめる。しかる。
大辞林	①腹を立てる。おこる。 ②ごつごつした形をする。角張る。 ③荒々しく動く。	①腹を立てる。立腹する。いかる。 ②しかる。
角川必携国語辞典	①相手の不正なおこないや、自分に対する不当なあつかいに対して、心の中で強くいらだちあれる。 ②かどばる。	①腹を立てる。 ②しかる。
新明解国語辞典	(自五)①許しがたい事柄に接し、不快感を抑えきれず、いらだつた状態になる。 ②四角に、張って見える。	(自他五)①がまん出来なくて、不快な気持ちが言動に表われた状態になる。(古風な表現は「いかる」) ②目下の者などのやり方が悪いと言って、強い言葉でしかる。

表3-25. 梅雨(つゆ、ばいり)の語義記述比較表

字	梅雨	
	つゆ	ばいり
日本国語大辞典	六月前後の、雨やくもりの日が多く現れる時期をいう。また、その時期の気象状況、北海道を除く日本および中国の揚子江流域、朝鮮南部に特有のもの。ばいり。五月雨(さみだれ)。	(梅の実の熟する時期に当たるからとも、また、物に黴(かび)が生じやすいからともいう) 夏至を中心とした前後およそ二〇日ずつ程の雨期。または、その雨。日本本土、南朝鮮、華中、華南に特有。この頃は日本付近にはほぼ東西に走る停滞前線(梅雨前線という)が生じ、これに沿って低気圧が通り、雨を降らせる。五月雨。つゆ。
広辞苑	六月(陰暦では五月)頃降りつづく長雨。また、その雨期。さみだれ。ばいり。	六月上旬から七月中旬にかけて日本・朝鮮半島南部・長江流域地方に起こる雨季。また、その時期の雨。六月一〇日頃本格的となり、二〇日過ぎに中休みがあつて、後半は驟雨・豪雨を伴うことが多い。停滞性の梅雨前線に沿って低気圧が連なつて東進して雨を降らせる。東北、北海道地方では、やや不明瞭。梅霖。さみだれ。つゆ。
大辞泉	6月ごろの長雨の時節。また、その時期に降る長雨。暦の上では入梅・出梅の日が決められているが、実際には必ずしも一定していない。北海道を除く日本、中国の揚子江流域、朝鮮半島南部に特有の現象。五月雨。ばいり。	6月上旬から7月上・中旬にかけて、本州以南から朝鮮半島、揚子江流域に顕著に現れる季節的な雨。梅雨前線を低気圧が次々と東進して雨を降らせるもの。入梅の前に走り梅雨の見られることが多く、中休みには五月晴れとなることもあり、梅雨明けは雷を伴うことが多い。つゆ。さみだれ。
大辞林	六月頃降り続く長雨。また、その頃の季節。太陽暦で六月一〇日頃から七月一〇日頃までの間。五月雨。ばいり。	(梅の実の熟する頃に降る雨の意。また、この時期に黴が生じやすいことから黴雨の意ともいう) 六月から七月中旬にかけ、朝鮮南部、長江下流域や北海道を除く日本に見られる雨季。梅雨前線を低気圧が次々と東進することによる。五月中旬頃に走り梅雨を見、六月中旬頃に梅雨入り(入梅(にゅうばい))となる。雨がちて梅雨冷え(梅雨寒(つゆぞむ))のする陰鬱な天気が続くが、梅雨の中休みには五月晴れになることもある。梅雨の末期には、ときに集中豪雨を各地にもたらす。やがて太平洋高気圧が強まって前線を北方へ押しやると梅雨明け(出梅(しゅつばい))となつて盛夏を迎える。雨量の少ない空梅雨(からつゆ)の年や梅雨明け後に戻り梅雨をみる年もある。つゆ。さみだれ。
角川必携国語辞典	六月から七月中ごろまで降りつづく長雨。また、その季節。さみだれ。「ばいり」とも。	毎年六月から七月初めごろまで続く長雨。「つゆ」とも。
新明解国語辞典	「ばいりの季節」の意の和語的表現。	六月から七月上旬にかけて、北海道を除く日本各地に続く長雨。つゆ。さみだれ。

表 3-26. 博士（はくし、はかせ）の語義記述比較表

字	博士	
語	はくし	はかせ
日本語		
日本語大辞典	<p>①（古くは「はくじ」とも）「はかせ（博士）①②」に同じ</p> <p>②学位の一つ。わが国では明治三〇年（一八八七）の学位令によって、文部大臣が授与する博士・大博士を設けたのに始まる。現行制度は昭和二八年（一九五三）の文部省令「学位規則」によるもので、大学院を卒業し博士論文の審査と試験に合格したもの（課程博士）と、学歴以上の学識があると認められたもの（論文博士）との二つがある。ドクター。ドクトル。</p>	<p>①学問や芸道などで、その道に精通した人。深い知識や高い識見などをもっている人。人を教えるだけの力をもっている人。はくし。</p> <p>②官職・地位の称号。</p> <p>④上代、百濟から送られた学問技術の専門家の称号。</p> <p>⑤指導的な識者に与えられた称号</p> <p>⑥令制で、特定の学術・技芸に専門的に従事し、かつその分野の教育を担当する職の総称。または、その人。</p> <p>⑦江戸時代、藩儒の称として用いた。</p> <p>⑧明治二年（一八六九）七月八日、大学校に設けられた官名。生徒を教授したり、国史を編纂したり、洋書の翻訳にあたりたり、病院や医業関係のことなどをつかさどった。また、その官にある人。大・中・少の三階級に分かれた。のち、官制の改革により、大学、文部省に属したが、同五年九月三日廃止。</p> <p>⑨明治三年（一八七〇）四月五日、宣教使のうち、大・中・少宣教使を改称した呼び名。同五年の官制改革によって、宣教使の名称とともに廃止された。</p> <p>⑩「はかせ（博士）の命婦」の略</p> <p>⑪「ふしはかせ「節博士」の略」平曲、謡曲などの「うたいもの」、あるいは声明（しょうみょう）などの節のきまり。また、それを示すために文句のそばに書きしるす点や線の譜。墨譜。胡麻点。</p> <p>⑫手本。模範。標準。規準。</p> <p>⑬学位としての博士（はくし）のこと。</p>
広辞苑	<p>自立的研究能力と学識を有する者に授与される学位。現在の制度では、大学院の博士課程を修了し、博士論文の審査に合格した課程博士と、課程によらず論文提出によって学位を得る論文博士とがある。はかせ。ドクター。</p>	<p>①学問またはその道に広く通じた人。ものしり。学者。</p> <p>②律令時代の官名。大学寮に紀伝（文章）・明経・明法・算・音・書、陰陽寮に、陰陽・暦・天文・漏刻、典業寮に、医・女医・針・按摩・呪禁の各博士があって、それぞれ学業を教授した。</p> <p>③明治初年、大学生の教授、国史の修撰、洋書の翻訳、疾病の治療をつかさどった奏任官。</p> <p>④学位としての博士の俗称。</p> <p>⑤声明・催馬楽・朗詠などで用いられる線形の譜。詞章の左（または右）に直線・折線・曲線を連ねた記号を墨で書き入れ、その角度・長短・形状により旋律を表す。早歌・謡曲などで用いる記号は線がごく短く胡麻粒のように見えるので、胡麻点という。節博士。墨譜。転じて、手本。規準。</p>
大辞泉	<p>①学位の一。大学院の博士課程を修了し、博士論文の審査および試験に合格した者に授与されるもの（課程博士）と、博士論文の審査に合格して博士課程修了と同等以上の学力があると認められた者に授与されるもの（論文博士）がある。ドクター。</p> <p>②→はかせ（博士）</p>	<p>①学問やその道の知識にくわしい人。</p> <p>②学位の「博士はくし」の俗称。</p> <p>③律令制の官名。・・・節博士。</p>
大辞林	<p>学位の一。大学院の博士課程を修了し、博士論文の審査および試験に合格した者、または学歴のいかんを問わず論文審査・試験に合格した者に与えられる。ドクター。はかせ。</p>	<p>①その方面のことに詳しい人。ものしり。</p> <p>②「はくし（博士）」に同じ。</p> <p>③律令制で、諸官司にあって学生（がくしょう）の教育に従事した官職。</p> <p>④明治初年、大学生の教授、国史の編修、洋書の翻訳、病気の治療などをつかさどった奏任官。</p> <p>⑤「墨譜」とも書く）声明（しょうみょう）や雅楽の音楽曲の記譜で、旋律を表示する記号。歌詞の各文字の左側に記し、折線・曲線によって旋律の動きを表す。広義には謡曲などの胡麻点（文字の右側）をも含めて言う。西洋のネウマに当たる。</p>
角川必携国語辞典	<p>学位の一つ。専門の学問で、すぐれた成果を挙げたと認められた者にあたえられる。文学博士・法学博士・医学博士など。「はかせ」とも。</p>	<p>①学問やある分野にとってもくわしい人。</p> <p>②→「はくし」</p>
新明解国語辞典	<p>専門の学術について水準以上の研究をした人に与えられる学位（を持った人）。「はかせ」とも。ドクター。（日本の制度では、（大学院で後期博士課程に三年以上在学した人が）論文の審査に合格すると授けられる）</p>	<p>①俗に、博士ハクシの称。</p> <p>②学問や、その方面の知識・技術に詳しい人。</p> <p>③奈良時代以降、宮中の学寮で学生を教えた職名。</p>

表 3-27. 白髪（しらが、はくはつ）の語義記述比較表

字	白髪	
語	しらが	はくはつ
日本語大辞典	<p>（上代は「しらか）か）</p> <p>①白い毛髪。白くなった毛髪。はくはつ。</p> <p>②昔、小児の髪置きの際に、長寿を祈ってその子どもの頭にかぶせたかぶり物。絹のすが糸、あるいは真綿で、角子の下げ髪をつくり、それに末広松竹梅の造花をつけた。しらがわた。</p> <p>③婚礼のおくり物にする麻。長命であることを祈る気持ちから用いられる。ともしらが。</p> <p>④白い絹糸。</p>	<p>白い頭の毛。白くなった毛髪。しらが。</p>
広辞苑	<p>①色素がなくなり白くなった髪。</p> <p>②昔、子供の髪置きの際に、その長寿を祈って頭にかぶせたかぶり物。すが糸・麻で作った。また、綿帽子も用いる。</p> <p>③婚姻の贈り物に用いる麻。</p> <p>④白い絹糸。（日葡）</p>	<p>白い毛髪。しらが。</p>

大辞泉	(上代は「しらか」か) ①色素がなくなったために白くなった髪。はくはつ。 ②昔、幼児の髪置きに祝いに長命を祈って用いたかぶり物。すが糸・麻苧・真綿などで白髪垂れた形に作る。しらがわた。 ③婚礼の祝いの贈り物に用いる麻または白絹の束。 ④白い絹糸。	白くなった毛髪。しらが。
大辞林	①色素がなくなり、白くなった髪。はくはつ。 ②婚礼の贈り物に用いる麻。 ③昔、子供の髪置きに祝いに、長寿を願って頭にかぶらせた垂髪。紐糸すがいと・麻などで作った。 ④白い絹糸。	白くなった髪の毛。しらが。
角川必携国語辞典	白くなった髪。はくはつ。	白くなった毛髪。「しらが」とも。
新明解国語辞典	①年をとったり、急に苦勞をしたりしたために、白くなった頭髪。 ②婚礼の贈り物に使う、麻の繊維を髪の毛のように細くしたもの。	全体がしらがの髪。

表 3-28. 変化(へんか、へんげ)の語義記述比較表

字 語	変化	
	へんか	へんげ
日本国語大辞典	①ある性質・状態などが他の性質や状態に変わる。または、変えること。へんげ。 ②文法で、同一の語が用法に応じて語形を変えること。格変化、語尾変化など。 ③囲碁や将棋で、盤上にあらわれないが、想定される打ち手。またはさし手。また、一つの着手によって必然的に生ずる幾通りかの打ち方やさし方。	(「げ」は「化」の呉音) ①神仏・天人などが仮に人間の姿になって現れること。また、そのもの。神仏の化身(けしん)。権化(ごんげ)。 ②動物などが姿を変えて現れること。また、その物。化け物。 ③神変不可思議な現象。 ④「へんか(変化)①」に同じ。
広辞苑	①かわること。ある状態から他の状態に変わる。こと。 ②(言)動詞・形容詞・助動詞などの語形の変ること。語形変化。活用。	①形が変わって違ったものが現れること。 ②神や仏が仮に人の姿となって現れること。権化。 ③動物などが姿をかえて現れること。ばけもの。妖怪。
大辞泉	①ある状態や性質などが他の状態や性質に変わる。こと。 ②文法で、単語の語形が人称・数・格などに応じて変わる。こと。	①神仏などが本来の形を変えて種々の姿を現すこと。また、その現れたもの。権化。 ②動物などが姿を変えて現れること。 ③人がその姿・形を次々に変えること。
大辞林	①ある物事がそれまでとは違う状態・性質になる。こと。変わる。こと。 ②文法で、同一の語が、文中のほかの語との関係や用法に応じて語形を変える。こと。日本語の用言・助動詞の活用。ヨーロッパ諸語の動詞の人称変化、名詞の格変化の類。	①靈魂や動物などが姿を変えて現れること。化けて出ること。また、その現れたもの。 ②神仏が衆生を救うため、人などの姿をとって現れること。また、その現れたもの。権化。化身。
角川必携国語辞典	性質や状態などが変わる。こと。	もともとの姿を変えてあらわれる。こと。キツネなどが化けたり、神仏が人の姿となってあらわれたりすること。
新明解国語辞典	①時間的・空間的な推移によって物事の性質や状態などに違いが現れる。こと。 ②(文法で)活用②	神や仏が仮に人の姿になって現れること(現れたもの)。 (狭義では、動物などが人の姿に化けたものを指す)

表 3-29. 抱く(いだく、だく)の語義記述比較表

字 語	抱く	
	いだく	だく
日本国語大辞典	①両腕にかかえて持つ。だく。うだく。 ②中に包み込むようにする。擁する。 ③心の中に、ある考えや感情を持つ。	(動詞「いだく(抱)」の変化した語) ①腕にかかえて胸の前に支えもつ。 ②ある考え・感情を心にもつ。ひそかに思う。 ③他人に、自分と同じ考えや行動を無理にとらせる。特に、悪事や罪を自分とともにさせる。だきこむ。 ④遊女屋の仲居が、替間を情夫としてもつ。江戸時代、京都祇園の遊里で用いられた語。 ⑤男女が抱擁する。交授する。
広辞苑	【他五】①腕の中にかかえこむ。だく。 ②考えや感情を心に生じさせる。	【他五】①腕の中にかかえこむ。 ②男が女と情交する。
大辞泉	①腕でかかえ持つ。だく。 ②かかえるように包み込む。 ③ある考えや感情をもつ。 ④しっかり守る。擁護する。	(「いだく」の音変化) ①⑦腕を回して、しっかりとかかえるように持つ。 ④卵をかえすために、鳥が卵の上にはがむ。 ②男性が女性と共寝をする。同衾する。 ③人をまきぞえにする。人を罪に陥れる。
大辞林	①「だく①」の文語的な言い方。 ②ある考え・気持ちを心の中にもつ。	(「うだく」「いだく」の転) ①両腕を回して物の中にかかえこむ。

		②男が女と肉体関係を持つ。 ③仲間に引き入れる。
角川必携国語辞典	①うでの中にかかえる。 <u>だく</u> 。 ②心の中にもつ。	相手を両うでですっかりしめて動かないようにする。
新明解国語辞典	①(雅) <u>だく</u> 。 ②当面の事態に対する反応として、ある種の思い詰めた気持を持つ。	①かかえるようにして胸もとに持つ。 ②「(愛する)人と同衾する」意の婉曲表現。

表 3-30. 牧場 (ぼくじょう、まきば) の語義記述比較表

字	牧場	
	ぼくじょう	まきば
日本国語大辞典	牛・馬・羊などを放牧するのに必要な草地や設備のある <u>場所</u> 。 <u>まきば</u> 。	牛・馬・羊などを放し飼いにしておく <u>場所</u> 。 <u>牧</u> 。 <u>ぼくじょう</u> 。
広辞苑	家畜を放牧するための設備をした <u>土地</u> 。 <u>まきば</u> 。	牛馬などを放し飼いにする <u>場所</u> 。 <u>牧</u> 。 <u>ぼくじょう</u> 。
大辞泉	牛・馬・羊などの家畜を放牧する設備をもった <u>場所</u> 。 <u>まきば</u> 。	牛・馬・羊などの家畜を放し飼いにする <u>場所</u> 。 <u>まき</u> 。 <u>ぼくじょう</u> 。
大辞林	牛や馬などを生産・育成する設備を備えた所。 <u>まきば</u> 。	柵などで囲い、牛や馬などを放し飼いにしておく所。 <u>ぼくじょう</u> 。 <u>まき</u> 。
角川必携国語辞典	ウシ・ウマ・ヒツジなどを放し飼いできるようにした、広い草地。 <u>まきば</u> 。	ウシ・ウマ・ヒツジなどを放し飼いにするところ。「 <u>ぼくじょう</u> 」とも。
新明解国語辞典	牛馬などを放牧出来るように設備した土地。 <u>まきば</u> 。	「 <u>ぼくじょう</u> 」の和語的表現。

表 3-31. 末 (すえ、まつ) の語義記述比較表

字	末	
	すえ	まつ
日本国語大辞典	①草木の上方の末端。また、 <u>こずえ</u> や枝先など。 ②物の先端。末端。 ③山のいただき。山頂。また、山の奥。 ④道や野のはて。はずれ。 ⑤子孫。あなすえ。 ⑥将来。未来。ゆくすえ。のち。 ⑦ある期間の終わり。おわり。末期。 ⑧生涯の終わりの時期。晩年。 ⑨道義や政治、風俗、財産などの衰えた世。末の世。 ⑩月末。下旬。 ⑪時間のかなりたったあと。 ⑫物事の行われたあと。結果。また、なごり。 ⑬人の言ったその方向。これから行く方向。 ⑭複数の子のうち、いちばん年少の子。末子。 ⑮幼少。 ⑯末座。末席。下座。 ⑰短歌の下の句。 ⑱文や単語の終わり。文末や語尾。 ⑲後編。 ⑳もと。起点。 ㉑宮中、將軍、大名などにつかえた女中。おすえ。 ㉒下等。下級。また、そのもの。 ㉓主要でないこと。 ㉔下流。川下。しも。 ㉕神楽歌を奏するのに神座に向かって右方の座席。また、そこにすわる奏者。末方。末方の主唱者である末拍子(すえびょうし)にもいう。また、その受持ちの歌の部分。 ㉖七、または八をいう、呉服屋仲間の符丁。	① <名> ①こな。粉末。 ②中国の旧劇の役割の一つで、端役のこと。 ② <接尾> 月や年など、 <u>ある期間の終わりにあたる時期</u> 。 『字音語素』末 慣 ①枝の先。 <u>こずえ</u> 。 <u>はし</u> 。 <u>すえ</u> 。最後。あと。 ②子孫。 ③たいせつでない。つまらない。ささいな。 ④こな。
広辞苑	(「もと(本)の対」) ①物の先端。 <u>はし</u> 。末端。 ②草木の先端。 <u>こずえ</u> ・枝先・葉ずえなど。うら。	(呉音。漢音はバツ) ① <u>すえ</u> 。 <u>はし</u> 。 <u>あと</u> 。最後。 ② <u>血すじを引いているもの</u> 。 <u>分かれ出たすえの方のもの</u> 。

	<p>③山のいただき。 ④末席。末尾。 ⑤ある期間の終り（に近い方）。 ⑥物事の結末。結果。 ⑦のち。未来。ゆくすえ。 ⑧子孫。後裔。 ⑨生れ順が一番あとであること。 ⑩政治道徳などがすたれた時代。すたれ衰えた時代。末世。澆季の世。 ⑪主要でない部分。取るに足りないもの。 ⑫短歌の下の句。 ⑬神楽歌を奏するのに神座に向かって右方の座席。また、そこにすわる奏者。末方。また、その受持ちの歌の部分。</p>	
大辞泉	<p>①（本もとに対して）続いているものの先端の方。末端。 ②川下。下流。 ③中央から離れた端の所。場末・野ずえ・末席など。 ④本筋から隔たった物事。つまらないこと。 ⑤物事を行われたのち。あげく。 ⑥ある期間の終わりのほう。 ⑦一生の最後の時期。晩年。 ⑧今からのち。行く末。将来。 ⑨子孫。 ⑩一番あとに生まれた子。末っ子。 ⑪仏教がおとろえ人心がすさみ、道徳も秩序も乱れ衰えた時代。末世。 ⑫短歌の下の句。 ⑬（本もとに対して）後編。 ⑭神楽歌を奏するのに、神座に向かって右方の座席。また、そこにすわる奏者。 ⑮草木の伸びている先。こずえ、枝先など。 ⑯山頂。山のいただき。 ⑰江戸時代、將軍・大名などに仕えた女中。おすえ。 ⑱身分の低いもの。下等・下級。</p>	<p>①終わり。すえ。 ②粉。粉末。</p>
大辞林	<p>①物のはし。先端。 ②きょうだいのうち、一番下の子。 ③子孫。後裔（こうえい）。 ④時間の最後。 ⑤未来。将来。ゆくすえ。 ⑥道徳観念のすたれた時代。 ⑦主要でないこと。大した問題ではないこと。 ⑧短歌の下の句。 ⑨神楽歌を奏する際、神座に向かって右方の席。 ⑩物事を行われたあと。結果。 ⑪草木の上方の先端。こずえや枝先。 ⑫後の世。後世。</p>	<p>①主に時を表す名詞の下に付いて、「すえ」「終わり」の意を表す。 ②こな。粉末。 漢 マツ貝 バツ漢 ①すえ。 ⑦はし。ものの先。 ④終わり。最後。 ⑦のち。将来。 ⑤その血統や流派などをくむもの。 ④低い位。下位。 ②最年少。 ②大切にない枝葉のことがら。 ③こな。</p>
角川必携国語辞典	<p>①さきのほう。はしのほう。 ②おわり。はて。結末。 ③将来。のち。 ④きょうだいのいちばん下。 ⑤子孫。 ⑥中心からはずれた、とるにたりないものごと。</p>	<p>①もののさきのほう。はし。 ②おわり。あと。 ③たいせつでない。 ④こまかいくず。</p>
新明解国語辞典	<p>①（本もとに対して）続いている物の、一番先（おしまい）の部分。 ②ある期間の終り。 ③（はるか）先の時期。 ④仏法の衰えた時代。 ⑤（その家系で）後に生まれた人。 ⑥（「…—、…」の形で接続助詞的に）（紆余曲折を経て）たどりついた最終的な結果。</p>	<p>【字音語の造語成分】 ①物の端（先）。 ②物の終り（の方）。 ③こな（薬）。</p>

表 3-32. 面（つら、めん）の語義記述比較表

字 語	面	
	つら	めん
日本国語大辞典	<p>①（主に「類」と表記）類の両傍、目の下の部分。ほお。 ②顔。おもて。また、顔つき。表情。後世は、他人の顔をののしっていう場合に用いる。 ③ある物の側面。また、それに近接したところ。ある物や場所に面したところ。かたわら。 ④物の表面。おもて。また、表面に現れた事柄。 ⑤本当は違う物事を、そうであるかのようにふるまうこと。 ⑥体面。面目。面子（めんつ）。</p>	<p>① <名> ①顔。人の顔。 ②顔につけるかぶりもの。 ④特定人物の顔をかたどったもの。伎楽や能楽などで用いられ、多く木製。 ⑤仮装に用いる紙などで作った仮面。 ⑥剣道や野球などの武術・スポーツで顔をおおう防具をいう。また、剣道では頭部に打撃を加えることもいう。 ③物の外側の、ほぼ平らな、一定の広さを持つ部分をさしていう。</p>

		<p>④表面。物のおもてまたは外側。 ㊦数学で、広がりはあるが厚みはない図形のこと。平面と曲面。 ㊧建築上の用語で、角材の稜角を削って作る部分をさしていう。柱や天井の棧。格縁（ごうぶち）などに用い、「切り面」「几帳面」「唐戸（からど）面」などの区別がある。 ④（形動）顔を合わせること。面接、面会すること。 ⑤紙に書かれた文書。また、その内容。 ⑥（「この面」「他の面」などの形で）事柄や事態の、ある部分・方向をさしていう。方面。 ⑦朝鮮の郡県の下にある自治的共同体の組織。 ⑧隠語。 ㊨盗人・やくざ・てきや仲間、顔や人相をいう。 ㊩盗人仲間、覆面をいう。 ㊫ <接尾> 平面状の物を数えるのに用いる。 ①鏡を数えるのに用いる。 ②琵琶などの楽器を数えるのに用いる。 ③硯（すずり）を数えるのに用いる。 ④能面・仮面などを数えるのに用いる。 ⑤碁盤などを数えるのに用いる。 ⑥盆を数えるのに用いる。 ⑦複数の紙を継ぎ合わせたものなどを数えるのに用いる。 ⑧書画などを収めた額を数えるのに用いる。 ⑨カルタの一組が描かれたものを数えるのに用いる。 ⑩テニスやバレーボールのコートを数えるのに用いる。</p> <p>『字音語素』 具 ①人の顔。 ②顔をあわせる。まのあたり。 ③顔につける具。仮面。 ④おもて。うわつら。平らなところ。 ⑤表れたところ。物の書かれた部分。 ⑥むき。向かっている方向。</p>
<p>広辞苑</p>	<p>①ほお。 ②かお。おも。おもて。後世は単語やのしりとして用いる。 ③物の表面。おもて。 ④まえ。あたり。近辺。→づら</p>	<p>①顔。 ①かお。おもて。つら。 ②顔をつき合わせるように向かい合った状態。その人の顔前でするさま。 ②顔に似せて作ったもの。また、顔につけるもの。 ①神楽・能・演劇などで着用する、顔の表情の種々相を基本としてつくったもの。おもて。 ②防具として顔にかぶるもの。剣道の面頬、野球の捕手のマスク、防毒面など。 ③剣道の決り手の一つ。面頬の上部・上側部を打つこと。 ③物の外郭を成す、角だっていないひろがり。その類似物。 ①物のおもて。 ②〔建〕部材の稜角を削り落として生ずる表面。形により切面・几帳面・猿面などがある。また、調理で芋・大根などの材料についてもいう。 ③〔数〕線の移動で生ずる図形。 ④物の向かっている方。むき。 ⑤抽象的に、着目・論及する箇所。 ⑥おもてに記した内容。 ⑦平たいもの。また、そうしたものを数える語。</p>
<p>大辞泉</p>	<p>①顔。顔つき。現代では、やや乱暴な言い方で、多くはいい意味では用いない。 ②物の表面。 ③ほと。あたり。 ④ほお。 ⑤（「づら」の形で）名詞の下について、…のような顔をしている、…のようなようすである意を表す。相手をさげすむ気持ちを込めて用いる。</p>	<p>①〈名〉 ①顔。 ②顔につけるかぶりもの。多くは人物・動物などの顔をかたどったもので、神楽・舞楽・能・狂言や、子供のおもちゃなどに使われる。仮面。面形。おもて。 ③顔面または頭部を保護するためにつける防具。剣道の面頬、野球の捕手がつけるマスクなど。 ④剣道の技の一。頭部を打つこと。 ⑤物の外側の、平らな広がり。表面。 ⑥数学で、線が運動したときにできる、広がりはあるが厚さのない図形。平面と曲面がある。 ⑦建築で、角材の稜角を削り落としてできる部分。切り面。几帳面など。 ⑧方面。 ㊫ <接尾> 助数詞。 鏡・琵琶・硯・能面・仮面・碁盤など、平たいものを数えるのに用いる。</p> <p>→漢「めん（面）」 ①人の顔。 ②顔を覆う道具。マスク。 ③顔を向ける。向き合う。</p>

		<p>④向いている方・側。向き。 ⑤物の、平らに広がった部分。 ⑥表面に記されたもの。</p>
大辞林	<p>①顔。おもて。「顔」よりもぞんざいな言い方。 ②物の表面。 ③(「づら」の形で)名詞の下に付いて、複合語として用いられ、そういう顔をしている、そういう様子である意を表す。相手をのしる気持ちを込めている語。 ④ほとり。あたり。かたわら。 ⑤ほお。</p>	<p>①〈名〉 ①顔。つら。また、顔立ち。 ②顔につけるもの。 ③人・動物などの表情を模して作ったもの。芸能・演劇などで用いる。おもて。仮面。 ④顔につける防具。剣道の面頬、野球の捕手のかぶるもの、防毒マスクなど。 ⑤剣道で、決まり手の一。頭部を打つこと。 ⑥顔を合わせる。向き合うこと。 ⑦外から見える、物の外側の(平らな)部分。 ⑧数学で、立体とその周囲の空間との境。平面と曲面の総称。 ⑨事柄のそれぞれの領域。 ⑩ある方面。ある部面。 ⑪材の角を削り取ったときにできる部分。柱や建具の棧などに用いる。切り面。唐戸面。几帳面など。 ⑫〈接尾〉助動詞。平たい物を数えるのに用いる。</p>
角川必携国語辞典	<p>①〈名〉かお。ほお。また、「かお」のぞんざいな言い方。 ②〈造語〉【「～つら」「～づら」の形で】 ③ものの表面。みため。 ④それらしい顔やようすであること。</p>	<p>①人の顔。つら。 ②演劇や舞踊などのときに、顔にかぶって役をあらわすもの。おめん。 ③剣道で、顔にかぶる防具。また、頭に打ちこむわざ。 ④名譽 ⑤顔を向きあわせる。まのあたり。 ⑥ものやことがらに向かっているほう・部分。向き。 ⑦ものの外側に向いた広がり。うわつら。 ⑧広がりのある平たいもの。 ⑨テニスコートなど平たいものを数えることば。</p>
新明解国語辞典	<p>①「顔」の意のやや俗語的表現。(軽い侮蔑を含意して用いられることがある) ②物の表面。</p>	<p>①顔。 ②(能楽・神楽などで)劇中人物の象徴として顔につけるもの。「仮面」とも。(かぞえる時にも使う) ③(剣道で) A顔・頭をおおう防具。「面頬」とも。 B「面^A」をねらって攻撃するわざ。 ④A立体と外部との境目を成し、広がりを持つが厚みは持たず、折れたり角張ったりした所の無い一つながりの部分。 B(幾何学で)ある立体図形と外部との境目になっているか否かにかかわらず、そのような形状を持つ図形。 ⑤二つ(二つ以上)のとらえ方があると判断されるものの、特定の一つ。 →【字音語の造語成分】 ①(直接)顔を合わせ(てす)る。 ②側面。 ③そこに書いてある限り。 →(本文)めん【面】 ④→いちめん(一面^③)→(本文)めん【面】</p>

4. 結びにかえて

本稿では、これまでほとんど研究対象とされてこなかった「同形異音類義語」に焦点を当て、6冊の国語辞典から語義を抽出し、今後の比較・検討のための整理を行った。各語についての具体的な考察は別稿に譲ることとするが、本稿の作業により、語義の差異が臆気ながらもある程度導出できたものと考えられる。今後は本稿を基に、日本語学習者に対する同形異音類義語の教授法を模索することを課題としたい。本研究が日本語教育の現場における同形異音類義語の理解の深化の一助となれば幸いである。

注

* 城西短期大学ビジネス総合学科・准教授

1 田中章夫(1971)「新聞語彙調査の同音語と同形語」『電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所報告39, pp.121-145

水谷静夫・松原順子・坪井美智子(1971)「同字異訓熟語集」『計量国語学』第58号, pp.21-40

2 新村出(編)(2018)『広辞苑』第七版, 岩波書店

- 3 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000～2002）『日本国語大辞典』第二版，小学館
- 4 同上
- 5 三木浩平（2014）「日本人英語学習者の英語の同綴異義語へのアクセス—プライミング実験による心理言語学的研究—」『第二言語』13巻，pp.19-37
- 6 菅野倫匡（2023）「近現代語のコーパスを構築する際の「同字異訓」の問題に関する覚え書き」『筑波日本語研究』第27号，pp.1-34
- 7 国立国語研究所（1971）『電子計算機による新聞の語彙調査2』国立国語研究所報告38，pp.306-314
- 8 日本語NAT-TEST・日本語学力テスト運営委員会（2014）『新訂 品詞別・1級～5級別1万語語彙分類集』専門教育出版
- 9 本稿で扱う辞典はすべて紙媒体のものであり、電子版は使用していない。
- 10 同形語の読みのうち1万語語彙分類集に1語以上の記載があれば対象語とした。
- 11 「3. 家」の読みである「け」、および「22. 性」の「さが」は、前者は国立国語研究所（1971）の同形短単位表に記載がなく、後者は国立国語研究所（1971）の同形短単位表および1万語語彙分類集に記載がないものであるが、同形異音類義語の一つとして筆者が追加した。
- 12 本稿では各語の用例については省略する。

参考文献

- 梅村祥之・清水司（2000）「音声合成システムのための同形異音語の読み分け」『豊田中央研究所R&Dレビュー』第35巻1号，pp.67-74
- 大島中正（1992）「異音同表記語：その種類と問題点」『同志社女子大学日本語日本文学』第4号，pp.1-11
- 大野晋・田中章夫（編）（2021）『角川必携国語辞典』第十五版，角川書店
- 柏野和佳子（2008）「国語辞典における多義語の意味記述の比較」（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書）
- 国立国語研究所（1971）『電子計算機による新聞の語彙調査2』国立国語研究所報告38
- 菅野倫匡（2023）「近現代語のコーパスを構築する際の「同字異訓」の問題に関する覚え書き」『筑波日本語研究』第27号，pp.1-34
- 田中章夫（1971）「新聞語彙調査の同音語と同形語」『電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所報告39，pp.121-145
- 伝康晴・中村純平・小木曾智信・小椋秀樹（2008）「語種情報を用いた同表記異音語の解消」『言語処理学会第14回年次大会発表論文集』pp.69-72
- 新村出（編）（2018）『広辞苑』第七版，岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000～2002）『日本国語大辞典』第二版，小学館
- 林龍平（2008）「同形同音異義語を用いた意味飽和効果の生起機序に関する検討」『日本教育心理学会第50回総会発表論文集』p.582
- 松村明（監）（2012）『大辞泉』第二版，小学館
- 松村明（編）（2019）『大辞林』第四版，三省堂

三木浩平（2014）「日本人英語学習者の英語の同綴異義語へのアクセス・プライミング実験による心理言語学的研究—」『第二言語』13巻, pp.19-37

水谷静夫・松原順子・坪井美智子（1971）「同字異訓熟語集」『計量国語学』第58号, pp.21-40

水谷静夫・田嶋一夫・佐竹秀雄・野村雅昭・石井正彦・樺島忠夫『朝倉日本語新講座1 文字・表記と語構成』朝倉書店

山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之（編）（2020）『新明解国語辞典』第八版, 三省堂